



舊典  
類纂

皇位繼承篇

附錄

六

和装本

76

4610

6



門 526  
號 4610  
卷 6



種神器篇

皇位繼承篇附錄



議官 福羽美靜 檢閱

少書記官 横山由清

大書記生 黒川真頼

編纂

神器起原

神器ハ天皇ノ護身ノ器ナリ、太古天照大御神、孫彦  
火瓊々杵尊ヲ以テ豊葦原中國日本國ノニ降スニ  
古名ナリニ降スニ  
方テ、此ノ寶器ヲ以テ之ニ授與ス、瓊々杵尊乃コレ  
ヲ拜受シ、降テ豊葦原中國ヲ治ム、瓊々杵尊崩ジテ  
後、子彦火々出見尊コレヲ傳フ、彦火々出見尊崩ズ、  
子鸕鷀草葺不合尊コレヲ傳フ、鸕鷀草葺不合尊崩  
ジテ後、子神武天皇コレヲ傳フ、神武天皇ヨリ以來、  
登世ノ天皇モ亦皆コレヲ傳ヘシコト太古ノ故事

皇位繼承篇 附錄

如シ、其ノ寶器ハ則チ三種ナルヲ以テノ故ニ之ヲ  
 三種ノ神器トイフ、古語拾遺ニ天璽又神璽ト云ヒ  
 允恭天皇紀ニ天皇之璽又天璽符又天皇之璽符ト  
 云ヒ、繼體天皇紀ニ璽符又天子鏡劍璽符ト云ヒ、推  
 古天皇紀ニ天皇璽印ト云ヒ、孝德天皇紀ニ璽紋ト  
 云ヒ、陽成天皇紀ニ天皇璽綬ト云フガ如キモ亦皆  
 三種ノ神器ヲイヘルナリ、此ノ條ハ其ノ起原ヲ詳  
 ニシテ、而シテ歷世ノ天皇コレヲ奉戴シテ以テ護  
 身ノ御璽ト爲スノ所由ヲ視ス

古事記上卷 於是天照大御神見畏閉天石屋戸而刺許母理  
 坐也爾爾○天照大御神素戔嗚尊所爲ノ甚強暴ナリ高天原皆  
 暗葦原中國悉闇因此而常夜往云云是以八百萬神於天安之  
 河原神集集而高御產巢日神之子思金神令思而集常世長鳴

鳥令鳴而取天安河之河上之天堅石○鐵床ノ取天金山之鐵  
 而求鍛人天津麻羅而作○而シハ字ノ下脱文アリ、恐ラクハ劍ヲ  
 雜刀斧ヲ作科伊斯許理度賣命令作鏡大○神ノ皇孫瓊々杵尊  
 ニ賜所者ニシ科玉祖命令作八尺勾瓊之五百津之御須  
 麻流之珠而云○此ノ玉ハ瓊々杵尊ノ降臨ノ時將天香山  
 之五百津真賢木矣根許士爾許士而於上枝取著八尺勾瓊之  
 五百津之御須麻流之玉於中枝取繫八尺鏡於下枝取垂白丹  
 寸手青丹寸手而此種種物者布刀玉命布刀御幣登取持而天  
 兒屋命布刀詔戸言禱白而云○天照大御神天石屋ニ入リ  
 コレヲ憂ヒ、束議シテ明鏡美玉等ヲ作リ、獻ズルノ狀ヲ爲スナリ  
 ヲリ貴キ神アリト爲シ、其神ニコトシテ、神靈ヲ作ルガ爲ニ、此  
 リ爾高天原動而八百萬神共咲○神鏡ヲ作リ、神靈ヲ作ルガ爲ニ、此  
 章ヲ掲グ、又此ノ鏡玉ヲ以テ神靈ヲ知ラシメ、作ルガ爲ニ、此  
 同書 須佐之男命云故所避追而降出雲國之肥河上在鳥

皇極經世一 附錄

髮地此時箸從其河流下於是須佐之男命以為人有其河上而尋覓上往者老夫與老女二人在而童女置中而泣爾問賜之汝等者誰故其老夫答言僕者國神大山津見神之子焉僕名謂足名推妻名謂手名推女名謂櫛名田比賣亦問汝哭由者何答白言我之女者自本在八稚女是高志之八俣遠呂智每年來喫今其可來時故泣爾問其形如何答白彼目如赤加賀智而身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜楹其長度谿八谷峽八尾而見其腹者悉常血爛也爾速須佐之男命詔其老夫是汝之女者奉於吾哉答白恐亦不覺御名爾答詔吾者天照大御神之伊呂勢者也故今自天降坐也爾足名推手名推神白然坐者恐立奉爾速須佐之男命乃於湯津爪櫛取成其童女而刺御美豆良告其足名推手名推神汝等釀八鹽折之酒且作廻垣於其垣作八門每門結八佐受岐每其佐受岐置酒船而每船盛其八鹽折酒而待故

隨告而如此設備待之時其八俣遠呂智信如言來乃每船垂入已頭飲其酒於是飲醉留伏寢爾速須佐之男命拔其所御佩之十拳劔切散其蛇者肥河變血而流故切其中尾時御刀之及毀爾思怪以御刀之前刺割而見者在都牟刈之太刀故取此大刀思異物而白上於天照大御神也是者草那藝之太刀也〇此後  
天照大御神ノ皇孫瓊々杵尊ニ賜  
フ所ノ者ニシテ神劍即チ是ナリ  
 同書 天照大御神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也云爾其太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命答白僕者將降裝束之間子生出名天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命此子應降也此御子者御合高水神〇高皇產靈之女萬幡豐秋津師比賣命生子天火明命次日子番能邇邇藝命也是以隨白之科詔日子番能邇邇藝命此豐葦原水穗國者汝將

皇位繼承卷 附錄

知國言依賜云爾天兒屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理  
 度賣命玉祖命并五伴緒矣支加而天降也於是副賜其遠岐斯  
 ヤ尺勾璵鏡ト遠岐斯イトアルハ其時ノ屋戸ノ前ニ招禱レテ  
 天孫瓊々杵尊ニ賜ヒテ以テ護身ノ幣物ト爲サレテナリ  
 此ノ作者ノコトハ日本書紀ハ石凝凝等命ト爲サレテナリ  
 モ見エタレドハレバ此ニ語拾遺等ニ及草那藝劍云云  
 而詔者此之鏡者專爲我御魂如拜吾前伊都岐奉云  
 ノ中ニモ鏡ヲ以テ依テ知ルベシタマ  
 フコト此ノ御言ニ依テ知ルベシタマ  
 古語拾遺 于時天祖天照大神高皇產靈尊乃相語曰夫葦原  
 瑞穗國者吾子孫可王之也皇孫尊瓊々杵而就而治焉寶祚之隆  
 當與天壤無窮矣即以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永  
 爲天璽劍所神璽予玉自從ハ此ノ書鏡劍ノ二種ヲ舉ゲテ玉  
 鏡劍ノ二種ニ從ヒ并セテ三種ノ神器ト稱スルコト云云  
 天皇紀首條大伴金村大連乃上天子鏡劍上神符再拜云云  
 延喜祝詞式大殿祭ノ日中臣奏天津璽乃鏡劍乎捧持賜天ナド見

エテ並ニ寶玉ヲ載セズ然レドモ寶玉モ此ノ中ニ在リテ三  
 種ヲ上リニ寶玉ナリ日本書紀神代卷一書ニ故天照大神乃賜天  
 津彦彦火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物ト  
 アリテ三種ハ必相具シテ鏡劍ヲ上ルトイハ寶玉モ亦必  
 相從ベシ即勅曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲  
 齋鏡

神器傳來ノ事

神器ハ天照大御神ノ皇孫瓊々杵尊ニ授與スル所  
 ノ者ニレテ護身ノ神器ナリ故ニ天皇登世以テ相  
 承ス崇神天皇ノ時ニ至テ神器ノ威靈ヲ恐レ之ヲ  
 大和ノ笠縫邑ニ祀ル而シテ後故アリ寶鏡ハ伊勢  
 ノ五十鈴川上ニ鎮坐シ寶劍ハ尾張ノ熱田ニ鎮坐  
 ス伊勢熱田ノ二宮ノ事ハ別ニ掲載ス此ノ條ニ載  
 スル所ハ神武天皇以來朝家ニ相傳ヘテ天皇皇位  
 ヲ繼承スルノ際ニ當テ必相受クル所ノ神璽ノ概

略ナリ、但シ神鏡往々祝融ノ災ニ罹ルコトアルガ  
如キハ記シテ別條ト為ス

古語拾遺 妖氣既晴無復風塵、建都橿原、經營帝宅、仍令天富  
命之孫 率手置帆負彥狹知二神之孫、以齋斧齋鉏始採山村

構立正殿 云 其物既備、天富命率諸齋部採天璽鏡、奉安正

殿、并懸瓊玉、陳其幣物、殿祭祀詞、其祝詞、次祭宮門、其祝詞亦

然後物部乃立矛盾、大伴來目建仗、開門、令朝四方之國、以觀天

位之貴 受天皇、皇位ヲ繼承スルトキハ必ス三種ノ神器ヲ

下歷世ノ天皇皆 聖詔ヲ遵守スルナリ、神武天皇以

崇神天皇紀 五年國內多疾疫、民有死亡者、且大半矣、六年百

姓流離或有背叛、其勢難以德治之、是以晨興夕惕、請罪神祇、先

是天照大神和天國魂二神並祭於天照大神殿之內、天照大神

鏡者專為我御魂、如捧吾前、伊都岐奉云、ト見云、日本書紀神

代卷一書是時天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰  
吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡トアルヲ見

テ所用ニアラザレバ此神ノ辨ゼズハ今然畏其神勢共住不安故

以天照大神託豐鍬入姫命天豐鍬入姫命ハ祭於倭笠縫邑、仍

立磯堅城神籬 邑ニ遷シハ大和國十市郡ナリ、神鏡ヲ奉安シ

テ時ニ當リテ命ヲ寶劔モ亦笠縫邑ニ遷シ、是齋宮ノ始ナリ、是亦

以日本大國魂神ト上アルニ和同國魂託瀆名城入姫命、瀆名

命ハ崇神天皇祭

古語拾遺 至于磯城瑞垣朝、崇神天皇ノ御宇、漸畏神威、同

殿不安、故更令齋部氏率石凝姥神、齋天目一箇、神齋二氏、凝

神ハ太古ニ神重ノ神鏡ヲ造リ、神ナリ、天目一箇、神ハ寶劍

ヲ造リ、諸氏各職ヲ世々ニ其ノ子孫ヲシテ、鏡劍ヲ模造セシム

セシコト、以テ見ルベシ、更鑄鏡造劔、以為護身御璽、是踐祚

之日所獻神璽鏡劍也、寶劍モ亦寶鏡ト以テ見ルベシ、仍就

於倭笠縫邑、殊立磯城神籬、奉遷天照大神、寶鏡及草薙劔、令

皇女豐鍬入姬命奉齋焉。○寶劔亦寶鏡。ト、モニ笠縫邑其遷祭之夕、宮人皆參、終夜宴樂。歌曰、美夜比登能於保與須我良爾。伊佐登保志由岐能與呂志茂於保與須我良爾。○崇神天皇六年二月、遷也。所遷之皇女豐鍬入姬命ヲ侍セシメテ改メテ神鏡神劔ヲ唯寶玉ヲ以テ來シテ傳來岐ノ鏡ヲ模造シテ以テ護身ノ寶器ト爲ス。以テ來シテ傳來岐ノ鏡ヲ模造シテ以テ護身ノ寶器ト爲ス。伊勢皇太神宮寶劔ヲ別掲載ス。張ノ熱田社ノ事ハ條ヲ揭載ス。張ノ允恭天皇紀條首雄朝津間稚子宿禰天皇。皇〇允恭天皇瑞齒別天皇。皇〇允恭天皇瑞齒別天皇。皇〇允恭天皇瑞齒別天皇。皇崩爰群卿議之曰、方今大鷦鷯天皇。皇〇仁德天皇之子雄朝津間稚子宿禰皇子與大草香皇子、然雄朝津間稚子宿禰皇子長之仁孝、即選吉日跪上天皇之璽。○崇神天皇ノ御宇、摸造セル所ヲ所ノ寶玉ト雄朝津間稚子宿禰皇子謝曰、我不天久離篤疾云。寡人篤疾不足以稱猶辭而不聽云。

元年冬十有二月、妃忍坂大中姬命苦群臣之憂吟、而親執洗手水。○手ヲ洗テ神器ヲ受ケルマハ進于皇子前、仍啓之曰、大王辭而不即位、位空之既經年月、群臣百寮愁之、不知所爲。願大王從群臣望強即帝位、然皇子皇〇允恭天皇不欲聽而背居不言。於是大中姬命惶之不知退而侍之。經四五刻、當于此時、季冬之節風亦烈寒、大中姬所捧鏡水溢而腕凝、不堪寒以將死。皇子顧之驚、則扶起謂之曰、嗣位重事不得輒就、是以於今不從。然今群臣之請事理灼然、何遂謝耶。爰大中姬命仰歡、則謂群臣曰、皇子將聽群臣之請、今當上天璽符。於是群臣大喜、即日捧天皇之璽符、再拜上焉。○反正天皇崩、群臣因テ神器ヲ上ル所無キヲ憂フ、既ニコテ正天皇大中姬命ノ諫ヲ容レ、遂ニ神器ヲ承ク。神武天皇ヨリナリ記ヲ以テノ者ハ恒典ノ代ノ天皇踐祚ノ時、神器ヲ承クルコトナリ。

繼體天皇紀 元年春正月辛酉朔甲子、大伴金村大連更籌議

曰男大迹王性慈仁孝順可承天緒冀慇懃勸進紹隆帝業云云  
 因武烈天皇崩立シテ繼體ノ君無シ群臣二月辛卯朔甲午大伴  
 金村大連乃跪上天子鏡劔璽符○神器ヲ繼體天皇再拜男大  
 迹天皇○繼體天皇謝曰子民治國重事也寡人不才不足以稱願  
 請廻慮擇賢者寡人不敢當大伴大連伏地固請男大迹天皇西  
 向讓者三南向讓者再大伴大連等皆曰臣伏計之大王子民治  
 國最宜稱臣等為宗廟社稷計不敢忽幸藉眾願乞垂聽納男大  
 迹天皇曰大臣大連將相諸臣咸推寡人寡人敢不乖乃受璽符  
 〇允恭天皇ヨリ武烈天皇ニ至テ七代ノ天皇踐祚ノ時神器  
 宣化天皇紀首二年○安閑天皇十二月○大兄廣國押武金  
 日天皇○安閑天皇崩無嗣群臣奏上劔鏡於武小廣國押盾尊宣  
 化天皇使即天皇之位焉○安閑天皇踐祚ノ時神器ヲ承ク  
 ナノ故

推古天皇紀首 當于泊瀨部天皇○崇峻天五年十一月天皇  
 為大臣馬子宿禰見殺嗣位既空群臣請淳名倉太珠敷天皇○  
 達天皇之皇后額田部皇女○推古天皇以將令踐祚皇后辭讓之  
 百寮上表勸進至于三乃從之因以奉天皇璽印○欽明天皇ニ  
 至テ四代ノ天皇踐祚ノ時神器ヲ承クルコト  
 孝德天皇紀首 天豐財重日足姬天皇○皇極天授璽綬禪位  
 策曰咨爾輕皇子○孝德天皇云輕皇子再三固辭云由是輕  
 皇子不得固辭外壇即祚○舒明天皇極天記サバ踐祚ノ時  
 ナルヲ以テ故ナリ天智天皇即位ノ禮ヲ定メテヨリ以テ  
 萬世コレニ法ル新主ノ如ク承クルコトモ神武天皇ヨリ  
 以來登世示シ其ノ故事ハ悉ク部上神璽之鏡劔ト云ク  
 九踐祚之日中臣奏ルハ人壽ハ部上神璽之鏡劔ト云ク  
 太古踐祚故事ニ據ルナリ人壽ハ部上神璽之鏡劔ト云ク  
 天皇踐祚ノ時神器如クトニ神器ハ無シニテ天皇踐祚ノ時  
 場即帝位於飛鳥淨御原宮ナリ持統天皇紀首云承クク四年  
 キハ恒典ナルヲ以テ御原宮ナリ持統天皇紀首云承クク四年  
 皇立登極篇 附錄



月戊寅朔、物部麻呂朝臣樹大盾、神祇伯中臣大鳴朝臣讀天、神壽詞畢、忌部宿禰色夫知奉、上神璽劍鏡於皇后、皇后即天皇位、  
ルトアリ、神璽ヲ相承ルベシク

陽成天皇紀 元慶八年二月四日乙未、先是天皇手書送呈太

政大臣經藤原基曰朕近身病數發動多疲頓、社稷事重神器巨

守所願速遜此位焉、宸筆再呈肯在難行、是日天皇出自綾綺殿

遷幸二條院、二品行兵部卿本康親王、右大臣從二位兼行左近

衛大將源朝臣多云扈從、文武百官供奉如常、但少納言不奏

給鈴之狀、諸衛不稱警蹕、神璽寶劍鏡等依例相從、  
字〇板本劍、

百官於院南門、詔曰現神止大八洲御宇、日本根子天皇加御命

良萬宣御命乎親王等王等臣等百官人天下公民衆聞給止宣

食國乃政乎永遠聞食倍喜御病時々發止有天萬機滯止久成

奴天神地祇之祭、急止有加止危美畏利念保之天皇位乎讓遜

給天別宮爾遷御坐止奴宣御命乎親王等大臣等聞給部陽成

位シ其ノ後主ハニ傳トスルナリ時ニ天皇神器ヲ以テ後主ニ傳ヘ

故ナ承詔天ケテ親王大臣等天皇ノ詔ヲ承忍美畏母國典爾准

天上天皇之尊號乎進留又皇位波一日母不可曠一品行式

部卿親王波即光孝天皇ナリテ諸親王中爾貫首毛御坐又前代

爾無太子時波如此老德乎立奉之例在、加以御齡母長給比御

心母正直久慈厚久慎深御坐天四朝爾佐仕給天政道母熟給

利乎百官人天下公民爾末天謳歌所歸成無異望、故是以天皇璽綬

乎奉天天日繼位定奉乎良久親王等王等百官人天下公民衆聞

給止部宣、中納言在原朝臣行平於庭誥之、百辟群寮並立侍焉、事

畢王公以下拜舞而退、於是以神璽寶劍鏡等付於王公、即日親

王公卿步行奉天子神璽寶劍鏡等、今皇帝〇光孝天於東二條

宮〇齊明天皇ヨリ清和天皇ニ至テ廿代神器ヲ相承ルコ

皇立繼後篇 附錄

遜位スルヤ、神器ニ於テ異ナルコト無シアリ、故ニ此ノ文ヲ  
モテ皇或ハ藤原基經ニ幽セラルル、ノ説アリ、故ニ此ノ文ヲ  
舉ゲテ以テ神器ヲ傳  
フルノ情實ヲ視ス

日本紀略 花山院 云 寛和二年六月廿三日庚申、今曉丑刻

天皇密々出禁中、向東山花山寺落飾、子時藏人左少辨藤原道

兼奉從之、先于天皇密奉、劔璽於東宮、東宮ハ懷仁親王ニ出

宮内○光孝天皇ヨリ圓融天皇ニ至テ七代神皇ヲ相承クル

原道兼○神器ヲ東宮懷仁親王ニ奉ル時ニ天皇未ダ宮ヲ出ザ

テ、聊其ノ情實ヲ辨ゼリ、宜シクハ參觀スベシ此ノ文ヲ舉ゲテ以

平治物語上卷 去程ニ信賴卿ハ同九日○平治元年十月夜子

刻許ニ左馬頭義朝ヲ大將トシテ其勢五百餘騎、院ノ御所○後

白河天皇ノ三條殿へ押寄、四方ノ門々ヲ打固、右衛門督○信

イ乘ナガラ年来御イトホシミヲ蒙ツルニ、信西ガ讒ニ依テ

信賴討レ進ラスベキ由承候間、暫ノ命助ラシ爲ニ、東國方へ

コソ罷下候へト申セハ、上皇○後白河大ニ驚カセタマヒテ、

何者カ信賴ヲ失フベカナルゾトテアキレサセ給へバ、伏見

源中納言師仲卿御車ヲ差寄、急ギ召ルベキ由申サレケレバ、

ハヤ火ヲ懸ヨト聲々ニゾ申ケル、上皇アワテ、御車ニ召ル

レバ、御妹上西門院モ一ツ御所ニ渡ラセ給ヒケルガ、同御車

ニゾ奉リケル、信賴義朝光泰光基季實等前後左右ニ打圍テ

大内へ入進ラセ、一本御書所ニ押籠奉ル云 去程ニ内裏ニ

ハ同十九日公卿僉議トテ催サレケリ、勸修寺左衛門督光賴

卿此程ハ信賴卿ノ舉動過分也トテ不參ニテオハシマシケ

ルガ、参内シテ承ラントテ云 サキタカラカニオハセテ入

給へバ、兵共モ大ニ恐奉リ弓ヲヒラメ矢ヲソバメテ通シ奉

ル、紫宸殿ノ後ヲ經テ殿上ヲ廻リテ見タマへバ、信賴卿一坐

シテ其ノ坐ノ上、藤達皆下ニゾツカレタル、光賴卿云 閑々

ト歩ミ信賴卿ノ上ニムズト着給フ云 信賴物モ宜ハズ着  
 坐ノ公卿モ一言ノ返答ナカリケレバ、増テ僉議ノ沙汰モナ  
 シ、程經テ光賴卿ツイ立テ、惡ウ參テ候ケリト閑々ト歩ミ出  
 ラレケリ云 荒海障子ノ北萩ノ戸ノ邊ニ、弟ノ別當惟方ノ  
 オハシマシケルヲ招寄宣ケルハ、公卿僉議トテ催サレソル  
 間參シタレドモ、承定タル事モナシ云 右衛門督ヲイフ  
 ハ御邊ニ大小事ヲ申合ルトコソ聞ユレ、相構テ隙ヲ窺ヒ玉  
 體恙ナクオハシマス様ニ思按セラルベシ、サテ主上〇二條  
 フ何クニオハシマスゾ、黒戸御所ニ、上皇ハ、一本御書所ニ、内  
 侍所〇神鏡ハ、温明殿ニ、劍璽ハ何クニ、夜ノオトバニト、左衛  
 門督次第ニ尋給ケレバ、別當〇藤原惟角ゾ答ラレケル云  
 去程ニ同二十三日〇十二月廿大内ノ兵〇信賴方六波羅〇平  
 清盛ヲヨリ寄ルトテ騷ケレドモ其儀モナシ云 二十六日

夜更テ藏人右少辨成賴一本御書所〇後白河上皇ノへ參テ  
 君ハ如何思召レ候、世間ハ今夜ノ明又前ニ亂ヘキニテ候、經  
 宗惟方ハ申入旨候ハズヤ、行幸〇當今ニテ即二條モ他所へ  
 成セ給ヒヌ、急キ何方へモ御幸ナラセオハシマセト奏セラ  
 レケレバ、上皇驚カセ給ヒテ仁和寺ノ方へコソ思召立メト  
 テ、殿上人ノ體ニ御姿ヲヤツレサセ給ヒテ、紛出サセオハシ  
 マス云 去程ニ主上〇二條天ハ北陣ニ御車ヲタテ、女房ノ  
 飾ヲ召シテ御髪ヲ奉ル〇天皇ノ女房ニ紛ラシタマフナリ 同御  
 寶物共ヲ渡シ奉ラントテ、内侍所ノ御唐櫃モ大床迄出シタ  
 リケルヲ、鎌田ガ郎等怪シメ奉リテ留進ラセケルヲ、伏見源  
 中納言師仲卿ニ申合セテ、坊門局ノ宿所へ遷シ奉ルトアルハ、鎌田政家  
 〇師仲神鏡ヲ坊門局ノ宿所へ遷シ奉ルトアルハ、鎌田政家  
 所ニ遷シ奉リシナリ、其ノ故ハ百練鈔永曆元年四月十九日  
 條ニ、去年十二月二十六日信賴卿亂逆之間、師仲卿破御唐

櫃奉取御體於桂邊經一宿云々  
 密軍唐櫃ヲ破リ御體ヲ出シテ自ラアリ  
 明旦軍捧持シテ途中ヨリ逃レテナリ其ノ  
 キテ後捧持シテ家ニ還リテナリ其ノ故ハ  
 小紫宸殿の大床に立て鑑をりし時大  
 入て持たりりるが心は其ノ具ハ内侍  
 つけて益也と云ふに及ばず其ノ具ハ  
 何れも益也と云ふに及ばず其ノ具ハ  
 りるもやがて益也と云ふに及ばず其ノ具ハ  
 ち具もやがて益也と云ふに及ばず其ノ具ハ  
 夜ヨリ廿七日ノ明且迄アリケルコト  
 小紫宸殿に逃レテ桂邊ニ匿レタリケル  
 時師仲ガ逃レテ桂邊ニ匿レタリケル  
 内ニハ入レ奉ラズテ車寄ノ屋ニ安置セ  
 云ク平治亂之時師仲車寄ノ屋ニ安置セ  
 中其體一新外居足高上敷薦一枚下  
 出内侍一人博士巳下女官等參仕之奉  
 テ知ララル中宮モ主上ト一ツ車ニ召  
 大納言經宗直衣ニ拍バサミシテ供奉シ  
 奉ル云左衛門佐重盛三河守頼盛常陸介  
 經盛三百餘騎

二テ土御門東洞院ニ待ウケ奉リ御車ノ前後ヲ守護シテ六  
 波羅ヘコソ入奉リケレテ平治物語ニハ神鏡ノコトヲ記シ  
 其始末ヲ辨テ以テ  
 愚管鈔卷五 八條太政大臣以下さも何人々世のうくて  
 さいころがせんど信頼義朝師仲等が中もさふとく世を行  
 ふべき人あり、ま上二條院の外もさふとく大納言經宗、まも羽  
 院もほけさるさつせらせりりる情方檢冰遠使別當おて有  
 けさ、その二人ま上皇ヲイフハハつきあふさく信賴同心か  
 てありりるもさつやきつ、清盛が臣とさるさつりて六波  
 羅の家もあつる、さうとく清盛しるさ波羅人行幸をささんと  
 儀、かためたりりり、其儀ハ近衛院東宮の時、學士もて知  
 通といふ階士有るさ子も、其明とく内の水鏡人ありけり、  
 惟方ハ知通が舞ありけり、さつありける、此其明と



リ後白河天皇ニ至テ十二代、神器ヲ相承シ而シテ事故死シ  
ニ條天皇ニ至テ京師ニ乱アリ、神器皇宮ヲ出テ暫、其ノ御坐  
ヲ異ス

百練鈔卷七 平治元年十二月廿九日行幸美福門院八條亭

清盛朝臣以下着甲冑、供奉御輿前後、○神璽寶劔ハ時ニ八條

御門ノ皇居ニ遷ル

永曆元年四月廿九日内侍所神鏡奉納新造辛櫃、去年○平治

フイ十二月廿六日信賴卿亂逆之間、師仲卿破御唐櫃奉取御躰

於桂邊經一宿、其後奉渡清盛朝臣六波羅亭○二條天皇時ニ

亭ニ遷御セル故ニ師仲卿神鏡ヲ六波羅亭ニ奉ルナリ、而レド

モ六波羅亭ハ假皇居ナレバ安置スベキ所モ無キヲ以テ、暫

之ヲ安置セル詔ハ其ノ家ニ安置セシム、造假御辛櫃奉納自師

仲卿姪小路東洞院家所還御温明殿也、左中將忠親朝臣依長

久例候之、自今夜三ヶ夜御神樂○神鏡皇宮ノ出テ師仲ノ亭

至テ宮ニ還御ス、崇神天皇以來此ノ如キノ變ハ未嘗コレ有

ラザルナリ、是ノ時ニ當テ神璽寶劔ハ未嘗大内ニ還御セズ、天

皇ト共ニ大炊御門ノ皇居ニ在リ、山槐記、永曆元年十一月十

三日、相中將不參、予取劍璽參上、公卿大將左京大夫隆

宰相中將不參、予取劍璽參上、公卿大將左京大夫隆

季卿、是ニ條天皇ノ平治ノ亂、後大炊御門ノ皇居ヨリ始テ

大内ニ還御スルヲイヘリ、神璽寶劔並ニ天皇ト共ニ還御セ

依テ見ル此ノ文ニ

同書卷九 壽永二年七月八日更有警固召仰、依賊徒○義仲

人ヲ入近江國中也、云廿一日新三位中將資盛卿以下為追

討使、○義仲行家ヲ討向宇治、其勢三千餘騎、廿二日源氏軍兵

等ガ兵ナリ、家已著東坂本、相率大衆登山、云○山ハ比叡上皇

皇ヲ後白河法召諸卿有議定、依賊徒事可有行幸院○安徳天皇

在所ヘ行幸アルベシトナ可憚復日哉、賢所○寶鏡渡御城外

無先例可憚哉、武士猶可守護院所哉、三ヶ條也、福原行幸之

外無賢所城外之例、或云賢所於今度者可奉具、雖無例各別有

其恐、或云猶可被渡温明殿、廿四日天皇俄行幸法住寺殿上皇

内侍所同渡、夜半上皇密々出御法住寺殿臨幸叡山院中男女  
 不知之失度○安徳天皇三種ノ神器ヲ奉ジテ、後白河上皇ノ  
皇ト共ニ在ルヲ厭ヒテ法住寺殿ヲ逃レ出タマヒシナリ  
 源平盛衰記卷三十一 同廿四日○壽永二年七月末の刻北  
面の者一人、心をあはれ院の侍所○法住寺ノへ参りて尋多旨  
こそを告へと申されば、法皇○後白河上何事と尋尋あり、  
奏し申りて、昨日己午の時、源氏等四方より数万騎を  
都へ攻入り、関を閉ぢ、平家朝のうぢを安堵し、  
三種の神器院内○院内トハ後白河上皇にあり、  
の刻、西國へ下向とせ、内々出立、と申されば、法皇神妙  
中より、北よりゆめく人子控、あらうと、おがしめ、  
里とて、その日の夜、入る殿上人、右馬頭、時をうり、  
て、北面下宿之三人、めさき、と、思ひて、鞍馬へ、

と志とざり、云々法皇うせさせ給ひ、めと披露あり云々  
 去程、平家朝の月、法皇を西國へ、御幸あり、云々  
 夜、給ひたり、云々かく、渡らせ給ひ、云々  
 面の、云々ち、云々さ、云々行幸む、云々  
 有べし、云々神の時、○七月廿五日出御あり○安徳  
皇京師ヲ御發 侍所を差遣せり、云々至上のい、云々幼き、云々  
あるが、何心もあ、云々神、○此ノ時、云々  
具ストアリ、前夜此ノ御所へ、云々行幸ル、云々二種、云々  
トモニ相具シ奉リシコト、云々以テ見ル、云々建禮門院、云々  
あめさ、云々内侍所、云々同、云々入、云々内、云々侍所、云々  
リヲ奉、云々来リテ、云々御車ノ内へ、云々入、云々奉、云々御、云々  
七月廿五日、云々来リテ、云々御車ノ内へ、云々入、云々奉、云々  
御乳人一人、云々劍、云々等、云々御、云々同、云々車、云々次、云々  
里亭参上、云々内侍所、云々御、云々並、云々玄、云々上、云々鈴、云々  
等令取之、云々一身奉、云々行、云々之、云々平、云々大、云々納、云々  
トアリ、云々以テ見ル、云々平、云々大、云々納、云々言、云々時、云々  
 中盛時の簡玄上、云々於、云々康、云々大、云々赤、云々子、云々川、云々霧、云々侍、云々叙、云々已、云々下、云々九、云々重、云々の、云々法、云々具、云々是、云々也、

とつゝ我さるゝとと出立りれば、取立をり多うり、乃里、座  
 の所、乃到り、砂り、ととめたり、乃と、乃や、  
○畫ノ御座ノ時  
 宮中ニ留リケルコト此ノ文ニ據テ見ルベシ、此御劍ハ  
 後白河天皇ノ御宇ノ頃、禁中ニ出現ストイヒシ劍ナリ、事ハ  
 委レク次  
 下ニ辨ズ  
 百練鈔卷九 廿五日 〇壽永二年七月平家黨類前内大臣 宗盛  
 フイ 已下率一族出奔西國、天皇 皇 〇安徳天 建禮門院同奉相具  
 内侍所神鏡神璽寶劍時簡殿上御倚子玄上鈴鹿皆以相具六  
 波羅以下家同時放火、洛中騷動無物于喻云、  
○天皇西國ヘ  
 ハ神器ヲ相具シ奉ルベキ事當然ノ理ナリ、然ルヲ當時ノ人  
 相謂テ平氏神器ヲ盜取テ去ルト為ス、穩當ニ非ラザルナリ、  
 時人又曰ク神璽ハ已ニ洛承四年ニ紛失ス、當時アルコト無  
 〇此モ亦妄誕ナリ、是等ノ事ハ次ニ紛失ス、當時アルコト無  
 玉海 壽永二年七月廿六日 子天晴云、已刻定能卿送札云、  
 御參事 〇藤原兼實ノ後白河法皇ノ御在所ニ、其ノ許シテ可ナ  
 リヤ否ヤヲ定能卿ヲ以テ奏聞セシニ、

イタルヲ奏聞了、早可御參入道關白同所被參入也云、楚忽出  
 立未刻登山、  
○後白河法皇ノ御在前、駢共人相并八人、各騎馬  
 在車前、  
○季經坂下侍四五人、申終就西坂下、自九條、牛手與延引  
 之間暫經程、酉刻輿輿昇等到来、  
○無動寺法即乘輿登西坂、其人  
 皆悉步行、  
○坂口五六、前駢等步輿前、猶路頭逢源納言、相具其昇  
 居輿退、  
○其人謁談、納言云、神璽寶劍内侍所賊臣、下ヲ以テ、悉奉  
 盜取了、  
○權中納言雅賴謂テ盜取ルト至當トイフ可ケンヤ  
 而無左右可追討平氏之由、被仰下之條甚不便、先可有劍璽安  
 全之沙汰、乃奏聞此間有勅許以親宗御教書遣多田藏人大夫  
 行綱之許了、此事猶荒沙汰也、仍時々可被仰遣女院、  
○建禮門  
 及時忠卿、  
○伴卿云、之許之由重以奏聞、可然之由有仰云、即  
 過了、  
○戊刻到東塔南谷青蓮院云、余暫休息之後參法皇御所  
 圓融房是路之間、前駢等取松明前行其程四五町許也、余烏帽  
 座主房也



直衣乘手輿以定能卿入見參依名參御前整程候粗申所思了  
 劍璽及源氏入京之間事也雖有和讒之恐只是存忠於納否者  
 在叡慮勅定曰依間可被引率西海之由所密行也云等宗威  
 トラレテ西國へ御幸スベキヲ恐レテ密ニ睿山ニ逃レク  
 トナリ而レドモ此ノ語ノミハ止ルベカラズ神器ノ事ニ  
 就ケルナリハ余奉問兩條之不審一者神璽紛失事去治承四  
 盜取之由一者三條宮存否事三條宮トハ高倉宮仰曰兩事  
 有共聞即仁王ナリ共不知真偽但風聞之旨共以不實歟璽由失宮不  
○兼實後白河法皇ニ問フニ治承四年神璽紛失ノ事ト高倉  
宮御存生トノ事ヲ以テス法皇並ビニ不實ナルヲ以テ答ス  
此ノ事實ニ疑ヲ容レ後世ノ人ト七日巳天晴依風病發動今朝不  
馬ゾ此ニ疑ヲ容レ後世ノ人ト七日巳天晴依風病發動今朝不  
 參御所定能卿來又定長為御使來云前内大臣○宗威以下追  
 討事内々雖被仰下猶可給證文而宣旨歟廳御下文歟如何余  
 云入主○安徳天已伴賊宜旨之條已謀書歟廳御下文可宜定  
 長又云若可為法皇○後白河法之詔書歟余云此事雖大事不

似彼如攝政詔歟廳御下文可宜余問云劍璽之沙汰如何定長  
 曰主上劍璽共可有還御之由定長書御教書相具主典代景宗  
 可遣平大納言之許余云此事甚厄弱沙汰歟縱雖遣御教書於  
 御使者可被止如名使兩三人可被遣歟凡此劍璽事以別奇謀  
 尋彼緣邊人可被誘求歟事雖似有私安穩出來事甚難有之故  
 也云八月六日戊辰云此日參院以定能卿申入以頭辨兼光  
 被仰下云立王事所思食煩也先可奉待主上還御哉將又且雖  
 無劍璽可奉立新主哉之由被行御卜之處官察共可被奉待主  
 上之由而於此事依有思食重被問官察各數人官二人申狀彼  
 是不同但吉凶半分也此上事何様可有沙汰哉可計申矣申云  
 官察ノ人々ノ先次第沙汰立ツベキ人ノ次第ヲイヘルニ  
 申シ言ナリ高倉天皇ノ皇子ヲ又北陸ノ宮  
 ナドヲイ頗以依運歟先有議定人意不一決偏可訪占卜之由  
 議奏之時可有御卜也而遮以被行御卜今又被乘彼趣之條太

以無其謂卜告不再三云而及度々之條又以不可然而於今者偏可被用卜告重隨良將吉神等之趣可有斟酌歟但愚按之所及立王之事懈怠愚心所傾思也其故先京華狼藉于今不止是人主不御座之令然也一次須被□□□□之處平武等〇宗威等奉具主上及三神寶有已赴海西不立主有征伐於議有妨是次我朝之習不得劍璽踐祚曾無例而繼體天皇為臣下被迎之時如國史文之踐祚甲申天皇移樟葉宮辛卯得璽符鏡劍即位云云雖無踐祚即位之分別如今文者即位以前已稱天皇〇踐祚已前トイヘドモ天皇ト記スコトハ史ノ又謂踐祚被移皇居其後得劍璽即位云云非〇又謂以下ノ文ハ日本書紀ノ文ニ取テ但シ他ニ出典アリヤ繼出典アリトモ然則准據尤可合之由所存也三凡天子之位一日不可曠政萬機悉亂云云於今遲々之條萬事違亂之源也早速可有沙汰不可有異議者左大臣

同參候云云非一所兼光參上少時飯來云所申可然就中為征伐可奉立人主之條事了肝心也仍早可有立王之事云云〇以上兼光ノ官察ノ建言又後白河法皇ノ先愚按次第之沙汰悉以違勅語等ヲ兼實ニ告グル言ナリ亂散々凡不能左右云云未曾有之事也天下滅亡只此時也可悲々々〇大刀契鈴印等ハ留テ大内ニアルコトハ此ノ十二日辰雨降云一昨日夜所遣時忠卿許之御教書返札到來其狀云京中落居之後可有還幸劍璽已下寶物等事可被仰前內府歟云云事跡頗有嘲哂之氣又貞能請文云能程可計沙汰云云〇先日京師ヨリ遣シテ使ノ時十九日辛亥陰晴不定早且間昨日定子細於兼光朝臣許國奉行注送旨如此參入公卿八人

左大臣 實房 忠親 成範  
 雅賴 長方 通方 親宗

皇位繼承篇 附錄

神鏡事

左大臣 皇后宮大夫 實房 前源中納言 雅賴

如諸道勘申可被存如在之儀然者立濱床設御座可儼  
恒例臨時之神事忽不可及御幸儀歟兼又可被祈申諸  
社并山陵

堀河大納言 忠親 八條中納言 長方 源宰相中將 通親

神鏡忽不令紛失誓御羈中被行如在之儀還似有其恐  
女官等候內侍所可致祈請歟尤凡可被申伊勢已下諸  
社歟且行德政且致祈請者定令還坐歟但任勘文之趣  
可存如在之禮者任天德之例召年料辛櫃可被奉安置  
內侍所歟神鏡縱不御何可棄內侍所哉

民部卿 成範 親宗朝臣

事出不慮之外更無可准之例但如諸道勘文申致如在

之禮專可令祈請歟御辛櫃已下任例可奉候諸先於明  
後日者召大藏省辛櫃以驛鈴可付之歟

劔璽之事

已上諸卿一同申云於踐祚者念可被遂行一日曠之庶  
務違亂歟云云其後被祈請者何不令還座哉

源中納言

其趣同上但無劔璽者行幸之夜頗可無禮儀以累代御  
劔璽可為御護歟〇累代ノ御劔ヲ以テ寶劔ニ代ヘン  
唯辛櫃ヲ安置シテ如在ノ義ニ  
從ハントイフ議モ亦此ニ起ル

源宰相中將

後漢光武晉元帝即位之後經年得璽彼既為明時何不  
因准乎但於本朝者敢無其類歟

源平盛衰記卷三十二 同卜き十八日 〇壽永二年八月十八日 左大臣

經宗、堀河の大納言忠親、民部卿成範、皇后宮権の大友實守、弟  
 の源中納言隆光、梅の小路中納言長方、源宰中將通親、右大  
 辨親宗系入せらるる、即位あり、びに別鏡臺の宣命、言諱の事  
 言諱定あり、頭の辨兼光の別法道、勘文を下す、左大臣は  
 次第子侍へ下さるる、神鏡の事ひく、みね在を存せざるの  
 諒、わへつて其おとせあり、誓定所を定め、帰降をまたるべき  
 別鏡臺の事本朝をかしく、更に例ありとらんども、浮家のお  
 とむとつ、何とて、やうに事をなむとあり、歸來をまたるべき  
 別鏡臺の儀式を備ふべし、りつと、他乃、紐を用ひるべき  
 次、云々、一同に宣めやされたり、同トき廿日、法住寺の新階、所  
 あり、高倉院の第四の王子、祚をふむとあり、  
 而シテ神器ナシ、春秋四歳、左大臣大内記光輔をめぐり、祚を  
 正位ニ非ラズ、  
 賜むる、太上法皇、皇ヲイフ、  
 〇後白河法の治者をもべきあり、先帝安

徳天皇 不慮、不脱履の事、  
 〇強テ脱履 又攝政の事、  
 〇後鳥羽天皇 踐祚ヲイフ、  
 〇先帝 〇先例を遠へざらば、  
 〇先例あり、此の時、  
 〇内侍所ハ如在ノ例ヲ用ニ居エラレタルコトヲ見  
 〇辛櫃ナルカ、年料ノ辛櫃ナル歟、何レニモ辛櫃ヲ居エラ  
 〇神樂依進ノ御祈也、トアルニ、  
 〇彌明瞭ナリ、  
 〇舊皇ヲイフ、  
 〇西國もハ又三種の神  
 〇似たり、叙位除目、  
 〇ハ、あるが、  
 〇遣ハシテ、  
 〇同書卷三十八、  
 〇十四日ニハ、  
 〇改元シテ、  
 〇元暦元年トイフ、

皇立遷祚篇 附録

人右衛門権の佐定長法皇の御子よりの故中の侍門中納言  
 家成の御の八條坂川の御堂にて本三位中將○重衡ヲイフ  
是ノ時ニ當テ  
 重衡擒ニ在リテ京師ニ在リを召し問ふべきとて、土肥の次郎實平因車  
 して来り侍人皇云云 定長院宣のありむき、條々来りて重衡  
 御も仰せふくめらせらるる中も三種の神器を都へ歸し入せ  
 奉らば、頼朝も仰せらるる死罪をもゆるされ西國へも入  
 してつらむべきとて、いざ仰せらるる重衡の御院宣の侍返事や  
 させらるる先祖將軍貞盛の時より故入道小のりまらるる代  
 と頼家の侍守りとして云云 あうんづくる至上の帰り入りせ  
 給をぎらんもの、三種の神器をわりのを入たてまつる事ハ有  
 かなくこそ存りへ、去らせらるる悉く院宣を蒙らるるハ有  
 やと私の使ひて申試に侍るべしとて、平左衛門の尉重國と  
 云さふらひを下しをさへべき由りさせらるるけり云云 同十五日

小重衡の御平左衛門の尉重國院宣を蒙りて西國へ下向院  
 よりハあつおねの石次花方とりふ者を添へ下させらるる、彼  
 の院宣もいそぐ一人聖帝北関九重の臺を出て九ありぬも  
 きと、三種の神器南海四國のさあひもうつりて数年をふ、と  
 つとる頼家の侍るげき亡國のりともあたるあり、彼の重衡の  
 仰ハ東大寺焼失の逆長あり、頼朝や受るの命も任せむべし  
 らく死罪を行はるるべしといへども、獨親類もあつて既生  
 擒とある、親多雲を悪ふの思ひ遠も千里の南海も浮ぶ、由存  
 友を失ふの情定めり九重の中途も通ぎらるる、然るば則三種  
 の神器を返し存るもあつて、速も彼の卿を寛宥せらるるべ  
 きあり者、院宣うくのぬり依て執達件のぬり、元暦元年二月  
 十四日、大膳大文業忠奉、平大納言とぞ書せらるる○平大納  
言ハ即時  
 忠ナ三位の中將も内大臣○宗盛  
ヲイフとぞ平大納言のりてへ院

皇代通記卷之九 附錄

宣のありむき委しく申すれり云  
 テ修理大夫時光ニ詔シテ神器還幸ノ使ヲ命ズ時光ハ時忠  
 ノ舅ナリ而レドモ時光詔命ヲ奉ゼズ是ニ至テ更ニ重國ニ  
 命ジテ使ヒセシム

東鑑卷三 壽永三年二月廿日己卯去十五日日本三位中將前

左衛門尉ヲイフ重國於四國告勅定旨於前内府ヲイフ宗盛是舊主並

三種寶物可奉歸洛之趣也件返状今日二十到来委承候畢藏

人右衛門權佐ヲイフ長書狀同見給候畢主上皇ヲイフ安徳天國母建

禮門院可有還御之由又以承候畢去年七月行幸西海之時自

途中可還御之由院宣到来云還御事ノ天皇及神器每度差

遣武士被禦行路之間不被遂前途已及兩年候畢於今者早停

合戰之儀可守攘災之誠候也云和平云還御兩條早蒙分明之

院宣可存知候也以此等之趣可然之様可令披露給仍以執啓

如件二月廿三日神壽永三年二月廿三日護身ノ寶物ナレ平氏ノ意ハ

命ヲ云テ天皇ノ還御モ共ニ拒グヲ以テルベシ然ルモ法皇ノ武士ニ  
 フナリ而テ天皇ノ玉海壽永三年二月廿九日師ニ還ラセテ  
 平氏來月一日可西國之由有議而忽日歸參大臣申云何故或  
 人云三重衡所遣前内大臣院使此兩如仰可令入洛於宗盛者  
 了於三箇寶物並主上女院八條殿者三日歸參大臣申云何故或  
 不能參入賜讀岐國可安堵御共ハ清宗ヲ可令入洛於宗盛者  
 事實者因茲追討有猶豫歎トアルハ虚説ナリ是ノ鑑ニ載セタ  
 ル平氏ノ返翰ニ其ノ情實ヲ知ルベキナリ是ノ鑑ニ載セタ  
 日壽永三年即後鳥羽天皇行ノルハ虚説ナリ是ノ鑑ニ載セタ  
 無ク壽永三年即後鳥羽天皇行ノルハ虚説ナリ是ノ鑑ニ載セタ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

源平盛衰記卷四十三 二位殿妻ナリ今ハ限りと見在テ

皇位繼承

えさせ給ひらる、御心すよひたる、御けしきりて、おのづこ  
 へ行進きぞと、御せらせらるる、そ然しとせ、二位殿ハ兵ども  
 が、御船ハ矢を、糸くせし、ハ、別の御船へ、行幸あり、糸くせしとて  
 今ぞしる、みかき、川の流れ、ハ、浪の、志、テ、あり、都ありと、ハ  
 と、此、給ひ、お、ち、て、以、海、お、入、たま、ひ、れ、せ、が、八、條、返、回、ト、く、つ、て  
 きて、入、たま、ひ、お、り、國、母、建、禮、門、院、を、お、ど、め、な、り、と、先、帝、ノ、御  
 弟、乳、母、帥、の、を、け、大、納、言、典、侍、以、り、の、女、房、達、御、の、と、り、人、お、り、ふ  
 し、ま、ろ、び、夢、を、と、く、の、へ、く、さ、け、び、給、お、り、い、く、さ、を、め、き、お、ぞ  
 似、たり、り、る、う、き、お、や、あ、ぐ、く、せ、給、お、り、お、む、く、ハ、見、な、り、り、せ  
 ども、二、位、殿、ハ、八、條、返、も、深、く、沈、ま、り、見、え、給、お、り、昔、ハ、一、天、の  
 ま、と、く、く、敵、を、お、長、生、と、い、お、ひ、門、を、お、不、老、と、名、づ、け、し、の、ど、と  
 ら、ハ、お、上、の、親、く、だ、つ、て、忽、ち、海、中、の、う、ろ、く、づ、と、あり、給、お、り  
 お、を、然、し、け、せ、○寶劍ト神璽トハ天皇ト共ニ海底ニ沈レコ  
 此ノ文ニ據テ見ルベシ、此ノ所東鑑及愚管

鈔平家物語各異説アリ、次下ニ  
 掲載シテ以テ其ノ是非ヲ辨ズ  
 東鑑卷四 元暦二年三月廿四日丁未、於長門國赤間關壇浦  
 海上源平相逢、各隔三町、艚向舟船、平家五百餘艘分三手、以山  
 峨兵藤次秀遠並松浦黨等為將軍、挑戰于源氏之將師、及午尅  
 平氏終敗傾、二品禪尼持寶劍、按察局奉抱先帝春秋共以没海  
 底、建禮門院藤重入水御之處、渡部黨源五馬允以熊手奉取之、  
 按察局同存命、但先帝終不令浮御○東鑑ヲ按ズルニ寶劍ヲ  
 奉ジテ海ニ沈シハ二位ノ  
尼ニテ安徳天皇ヲ抱キテ海ニ沈シハ按察局ト為ス、而シテ  
 按察局存命トアルヲ見レバ、此ノ女官獨海上ニ浮ビシヲ、兵  
 士ニ扶持セテラレテ僅ニ死ヲ免レタルナリ  
 平家物語卷十一 二位殿ハ日来ヨリ思設ケ給ヘル事ナレ  
 バ、鈍色ノ二衣打被キ練袴ノ傍高ク取、神璽ヲ脇ニ挟ミ寶劍  
 ヲ腰ニサシ、主上ヲ抱參ラセテ我ハ女ナリ共敵ノ手ニハ掛  
 ルマデ、主上ノ御供ニ參ル也、御志思給ハシ人々ハ急續キ給

皇位継承篇 附録

へヤトテ静々ト舩へズ歩被出ケル、主上今年ハ八歳ニゾ成  
 セ御座ス、御年ノ程ヨリハ遙ニネビサセ給ヒテ御形嚴シウ  
 傍モ照耀計ナリ、御髮黒クユラ、ト御背過サセ給ヒケリ、  
 主上アキレタル御有様ニテ、抑アマセ尼前我ヲバ何地へ具シテ行  
 ントハスルゾト仰セケレバ云ニ位殿聽テ抱參ラセテ波  
 ノ底ニモ都ノ侍フゾト慰メ參ラセテ、千尋ノ底ニゾ沈ミ給  
 フ

愚管鈔卷五

元暦二年三月廿四日舟舩軍の支度もていよ

くかくと閑て、頼朝が武士等かきあり来りて西國子赴  
 て長門の國門司の軍壇の浦と云所より舟の軍をいよ  
 ま上をばうむの二位宗盛母抱き参らせて御重寶劍取具しそ  
 海も入わたり、ゆきありらる女房あり〇愚管鈔及源平盛  
 皆二位ノ尼ノ主上及神重寶劍ヲ奉ジテ海ニ沈ムトアリ此  
 ノ説是ナリ東鑑ニ記スル所ハ誤聞ノ説ナリ用ナルベカラ

ズ、其ノ故ハ源氏ノ兵御舩ニ通ルニ方テ、天皇ヲ奉戴シテ海  
 ニ没セシハ女官ノ命ヲ女官ニ非ズ、二位ノ尼ノ所為ナルト必  
 セリ、継スル者アラシクヤ察スベキナリ、而シテ神璽ハ奉戴シテ  
 海ニ没ス、亦誤聞ノ説ナリ、諸書ニ東鑑ハ幕府ノ日記ナリ、故  
 アリト為テ、微ト爲スベシ、而レドモ東鑑ハ幕府ノ日記ナリ、故  
 テ此ニ並ニ非ラ辨ズ

源平盛衰記卷四十三

つものものと先帝の御舩へ乱を入

て大きな唐櫃の額おちやぶり中あるを取出し、おの  
 かたげ儲きまるといへば、おのちをあげむと、おのちをあげむ  
 同く、おのちをあげむ、平大納言時忠の御見給ひ、内侍所  
 の御前ありらる、せむしありと、おのちをあげむ、おのちをあげむ  
 閉じ制止を加ふ、武士ども御舩をまうり、おのちをあげむ、おのちをあげむ  
 納言も中より、おのちをあげむ、おのちをあげむ、おのちをあげむ  
 ども、おのちをあげむ、おのちをあげむ、おのちをあげむ、おのちをあげむ  
 のちをあげむ、おのちをあげむ、おのちをあげむ、おのちをあげむ、おのちをあげむ

〇源氏ノ軍兵  
 御舩ニ関入



ニ遺シ鎖ヲ断チタル唐櫃ハ新調ノ唐櫃ナリ、舊ノ唐櫃ハ大内  
 ハニ位ノ置シ奉戴シテ一且海底ニ沈シテ入ラガリシ  
 ナリ、内侍ノ所ノ平家櫃ヲ十官ケルハ侍ノ所ノ射付唐  
 スル取テ海ア平家物語巻十大ケル言佐ノ局ハ内侍ノ射付唐  
 櫃ヲ經テ倒レ給ヒケル武士共取目奉レ、其後御櫃トノ鎖  
 テ此ノ御蓋ヲ開クハト忽ニ目クテ其後御櫃トノ鎖  
 フリ此ノ御蓋ヲ開クハト忽ニ目クテ其後御櫃トノ鎖  
 フ奉ジテ説海疑ハズ、信用スベカラザルナリ櫃  
 愚管鈔卷五 重の浮信ハ海多浮々有るを、武者よりて

剛が浪の肉傍も有りる不見せんとけりけりハ○神重  
 二浮ビアガリタル源氏ノ兵コレヲ取上ゲ奉リシカドモ  
 何物トモ辨ゼザリシ内侍等ニ問ヒタバシテ始メテ神重  
 ナリト知レケルベシ此  
 玉海 元暦二年四月四日巳丁雨下、早且人告云於長門國誅伐  
 平家等了云云、未刻爲大藏卿泰經奉行義經伐平家了由言上、  
 其間有可被仰含事可參入之由被仰下之、灸治無術之間相勞  
 今兩三日之間可參之由申了、相次頭并光雅朝臣來臨余如例

隔障子謁之、依灸治不能衣服之故也、光雅仰云、院宣云追討大  
 將軍義經去夜進飛脚札相副申云、去三月廿四日午刻於長門國  
 團合戰於海上合自午正至晡時、云伐取之者云生取之輩不知  
 其數、此中前内大臣○宗威右衛門督清宗内府平大納言時忠  
 全真僧都等爲生虜云云、又寶物等御座之由同所申上也○京師  
 於テ神器ハ三種トモニ無但舊主○安徳天御事不分明云云  
 次第如此此上事何様可被行哉、先生虜等事如何、次三種寶物  
 飯來之間事又如何、此兩條殊可計申云云者、余申云生虜等事  
 短慮難及、只在叡慮、三種寶物飯來事自戰場飯洛之間事、偏爲  
 武士之沙汰公家不可知食歟、只不事問、無左右奉相具三神可  
 飯洛也、其後始可達天廳、其來着之所鳥羽御所可宜歟、豫得其  
 告先法皇○後白河法皇可渡御也、其後奉迎劔璽神鏡更可被告  
 申公家也、其時忽促車駕臨幸○後鳥羽天皇奉爲先劔璽還御

申公家也、其時忽促車駕臨幸○後鳥羽天皇奉爲先劔璽還御  
 臨幸ヲイフ奉爲先劔璽還御

内裏次第尤穩便歟、故何者先公卿次將等參戰場太不叶物議  
 還可爲壅怠之基、仍武士等無左右奉相具可參洛也、次入御内  
 裏之次第次將奉持之公卿步行供奉之條偏可似讓位之儀、頗  
 有憚此外又無他計、仍爲奉迎三神有行幸之條、於儀可謂崇重  
 靈器於禮又穩便歟、次可來着鳥羽給之由令申故者、武士等奉  
 具不備威儀令入洛中給之條尤非穩便歟、仍可有行幸鳥羽之  
 由所申也、愚案之所及大概如此者、光雅云上皇宮劔璽渡御如  
 何、余云此儀可然、但劔璽渡御之時避正居可御他屋也、是恐思  
 食之儀也、惣非院御所之條者、還又可無便隨宜之儀、何難之有  
 哉、又云飯京之間海陸其路如何、余云以無恐可爲先、可被尋知  
 案内輩也、光雅私云欲被十二社奉幣而既成追討之功了、然者  
 於今者、整被延引、可被申此慶由歟、是内々所申也、余云努々不  
 可然、殆可被縮行也、其故追討之條雖無疑、三種寶物事猶以有

不審是聊カ申狀不分明 縱雖安穩御座非無飯路之恐、然者彌  
 得此告雖片時可被急立也、不可及異議云云、光雅甘心退出了  
 ○義經ノ申狀ノ中ニ寶劔ノ紛失ノ事ハ未ダ記載セザリシ  
 ナリ、而レドモ寶劔ノ紛失ノ情實ヲ知テハ早ク京師ニ聞エタルコト  
 ナラザルヲ觀テ以テ其ノ申狀ニ從テルベシ、而レドモ其ノ確實  
 ナリト爲シテ以テ義經ノ申狀ニ同書テ同年同月廿三日神器大内ニ  
 入御ト儀ノ事ノ條ニ公卿可皆參也、又於南殿可令交取給、須  
 有宣制之儀、之寶劔ノ紛失セシ御頗似遺恨云云ナリ  
 是ニ至テ寶劔ノ紛失セシ御證ヲ得タルナリ  
 百練鈔卷十 文治元年〇元曆二年改元シテ四月廿五日戊寅、  
 戌時神鏡璽自鳥羽入御座朝所、權中納言經房卿參議泰通卿  
 權弁兼忠朝臣已下次將供奉、大夫判官義經等奉相具若宮御  
 入洛、侍從信清相具院御車奉迎云云、  
〇神鏡神璽奉迎ノ事玉  
 ニ次ニ掲載スベシ  
 シク參觀スベシ  
 玉海 元曆二年四月廿五日 戊寅 天晴 云 内侍所命婦讚岐守  
 女官等參仕、乘燭之後職事等入御船中  
戴レテ來リシ所

皇立繼承篇 附錄

ナリ御船令博士〇内侍所ノ奉令移入賢所〇寶鏡於省辛櫃了、  
 次泰通卿參入取神璽奉入同辛櫃了、女官等奉舁出之了〇大  
ノ年料ノ辛櫃ニ移入レ奉リテ、女官等駕輿丁奉荷賢所衛士  
ノ船中ヨリ舁出レ奉ルヲイフナリ奉荷神璽了、此間頭中將來車先行了、次行事辨着深沓行前、次  
 參議繪次上卿、次將壺繪次御辛櫃以以兩面覆之次神璽御  
 辛櫃同次藏人佐供奉、路間或騎馬各別路云云、行事辨兼忠始  
 終步行云云、路自作路經羅城門自朱雀大路北行、於六條朱雀  
 有院〇後白河法御見物云御車自六條東大路北行、自待賢門官  
 東門入御奉安朝所隆職宿禰伺候也、伺候女官史名追可尋今  
 夜尤可有供神物歟、為藏人方沙汰行事辨不知之其事不聞也、  
 守護諸衛交名同可尋注之〇東鑑ニハ神入浴ノ事ヲ記シ  
テ四月廿四日夜ト為ス從テカ  
 玉葉 文治二年四月七日天皇〇後鳥羽天出御南殿、内侍二

人相從前後、前内侍取璽後内侍空手〇寶鏡無キヲ以テノ故  
 寶劍未歸座以前年來之例如此〇後鳥羽天皇踐祚スルナリ雖キ  
ヲ以テ内侍空手ニテ相從フ、其ノ後神璽歸座シテ供奉セシ  
座セズ、故ニ寶劍ヲ持ツベキ内侍ハ仍空手ニシテ供奉セシ  
コト、此ノ文ニ  
 據テ見ルベシ  
 百練鈔卷十 文治三年七月廿日己未奉幣七社、依寶劍御祈  
 也、今日被遣勅使於長門國、且被祈謝為令搜索也、神祇大祐卜  
 部兼衡大藏少輔安倍泰成等為使、前安藝守佐伯景弘去比下  
 向、景弘合戰之時在彼國、存知寶劍沈沒之所云云〇東鑑文治  
日ノ條ニ、去々年平氏討滅之時、於長門國海上寶劍紛失、雖被  
搜索、于今不出來、猶被疑御祈禱、仰嚴島神主安藝介景弘、以  
人、依可被索之、所申、根米也、早可名、仰西海地頭等之、旨被、宣、下  
仍、今日有沙汰、可被充、催之、由云云、トアルヲ思へ、バ、朝廷、景弘  
ニ命ジテ六月頃ヨリ更  
ニ搜索セシメナリ  
 同書 文治五年六月廿六日甲寅寶劍未歸座、何様可被行哉  
 之由可進法家勘文云云〇文治元年三月ヨリ同五年六月ニ  
至テ、寶劍ヲ搜索ストイヘドモ獲ズ、

皇位繼承篇 附錄







者五雙アリ、仍今度モ五雙ニ結之、結了後又上ニ古結ヲ無此  
 餘結之、是關白所申也、今度次第以テ大治雅兼卿記有沙汰也、此  
 二夜御殿御帳中御枕二階上案覆赤色打物○匡房記紫絹云  
 ハ紫ノ絹ヲ以テ覆トセラレシナルベシ、大記應徳二年十一月  
 月廿六日ノ條ニ、内侍二人取ニ劍璽各、有紫絹覆、二幅長六尺、内  
 藏寮獻之、自内藏寮進之、内侍雖持之、自不取之、典侍取之、傳讓  
 位時計直取之也、此故僧女又上臈内侍外人不入夜御殿、白地  
 案朝餉之時同不近候、凡重輕服人不觸手、月障内侍闕如之時  
 或持之、不可然事也、内侍近衛將外更不觸手也、自神代如見我  
 被誓置尤可敬事也、宮中鏡一程物動返々不可頑、匡房曰不淨  
 人不觸手、他行之時以內侍令守護、又夜御殿火不可消、是為劍  
 璽也、○建曆御記ハ順徳天皇ノ宸記ナリ、天皇兄土御門天皇  
 以テ寶劍ト爲シテヨリ、伊勢太神宮ヨリ進リシ所ノ靈劍ヲ  
 ヤ幸ニ此ノ書アリ、以テ其ノ確證ト爲ス  
 神皇正統記卷五 廢帝○仲恭天皇 諱ハ懷成順徳の太子、母  
 ハ東一條院藤原の光子、故攝政太政大臣良經の女あり、承久

三年春の政より上皇○後鳥羽天皇 おぼしめたりありけ

きバ、倭子讓國一孫ハ順徳御身をありめと合戦の王をも一  
 つ依心小せきき給らん降るあり○仲恭天皇 皇ヲイフハ  
 讓位ありしと、即位登壇まじくなく、軍やぶせしりハ、  
 勇攝政道家の大臣の九條の弟へ此おきさせ給ふ、三種の神  
 若しバ閑院の内裏小捨置のせよき○仲恭天皇 神器ヲ閑院  
 退キタマフコトハ、皇年代略記ニモ、廢帝承久三年四月廿日  
 受禪七月九日廢之、神璽鏡劍并置閑院密令退九條第給未即  
 位云ト見エタリ、當時ノ事情以テ見ルベシ、但神器ニ於テ  
 ハ異状無シ、仲恭天皇遜位ノ後、神器ヲ後堀河天皇ノ傳ヘタ  
 マフコトハ、世人唯北條義時ノ奏スル所ニ  
 依ルトノ思ヘリ、然ラズ、事ハ次下ニ辨ズ  
 増鏡卷二○仲恭天皇 其頃いとかぎすへらも給をぬふる言おえ  
 たり、守貞親まごぞ聞えたる、高倉院第三の降あり、隱岐  
 の法皇○後鳥羽天皇 乃降こののみあれが思ふんやんごと  
 ありきと、むらう後白川の法皇安徳院の菟紫へおとす

て後えとまきとせ給ひりる、所うまごの言ちちえりのとき  
 なき給ひしあよりて、位子不即のせ給ひざりしうを、世中も  
 のうとめしきやうもく過し給ふ云云建保の以ノ順徳天皇  
 宮のうちの女房の夢中、かうぶりしるものあまきとまきと  
 初重を入るる願きおのく用意しそゆらのまよとゆふと  
 見しけむが、いとあやしうおおえと宮王ヲ貞親まのたり  
 えりまど、ひあでうさ布どののりあふんとおぼしるよとを、遂  
 ち沸ぐしをさへおろし給ひて、此世の所望のたちをてぬる  
 ちくちしてまをのし給へるも、此みだま乱ヲ承久ノいせ来て、一  
 院〇後鳥羽天の御ぞうの傍さまぐしきまへ給ひぬまを、  
 おのづからちひさねあど跡り給へるも、世子まきとをあたれ  
 てさりぬべき君もおおしきまきとぬまより、あづままきのあき  
 てまきと奏〇北條義時ノあのみ屋の親王王ヲ貞親の所子の後  
 〇世

堀川院十おあり給ふを、承久三年七月九日、爾俄も位子つけ  
 の御事 守貞親をい太上天皇子あり奉りて法皇と号  
 なる父の宮王ヲイフをい太上天皇子あり奉りて法皇と号  
 也、いとめでたくよこさまの御幸いおまきとる宮あり、孫ま  
 ちて位子つらせ給へるたえり光仁天皇より後、い給へる久し  
 かりつるも、めづらしくめだたし承久三年七月九日、俄も  
 位子、時ニ神器退ハ之ヲ傳フル者無キニ依テ、コレヲ院ノ皇  
 居ニ安置ス、退テ藤原道家ノ九條ノ第ニ御ス、神器ニ於テハ  
 無事ナリ、日ト後、堀河天皇踐祚シ、未ダ傳フ、後堀河天皇  
 然ルニ同日、堀河天皇踐祚シ、未ダ傳フ、後堀河天皇  
 堀河天皇故ヨリ此ニ増鏡ノ大御神ノ掲ゲテ、授與スル者歎  
 コト事故ナリ、以テ花園天皇ニ至テ、代ハ、神ノ實ヲ承テ、  
 後醍醐天皇ノ神ヲ奉リ、事ハ急ニ笠置山ニ退ク、  
 太平記卷二元弘元年云、七月三日、大地震有テ、紀伊ノ千  
 里濱ノ遠千瀉、俄ニ陸地ニ成事二十餘町ナリ、又同七日、西  
 刻ニ地震有テ、富士ノ絶頂崩ル事數百丈ナリ、卜部宿禰大龜



ヲ焼テトヒ、陰陽博士占文ヲ開テ見ルニ、國王位ヲ易大臣災ニ遭フトアリ、勘文ノ面穩ナラズ尤御慎有ベシト密奏ス云果シテ其年八月二十二日東使兩人、三千餘騎ニテ上洛スト聞エシカバ、何事トハ知ラズ京ニ又如何ナル事ヤ有ンズラント、近國ノ軍勢我モ我モト馳集ル、京中何トナク以テノ外ニ騷動ス、兩使已ニ京著シテイマダ文箱ヲモ開カヌ先ニ、何トカシテ聞エケン、今度東使ノ上洛ハ主上皇〇後醍醐天皇ヲイフ遠國へ遷シ進ラセ大塔宮〇尊雲法親ヲイフ死罪ニ行ヒ奉ランタメナリト、山門〇延曆寺ニイフ披露有ケレバ八月二十四日夜ニ入りテ、大塔宮ヨリ竊ニ御使ヲ以テ主上へ申サセ給ヒケルハ、今度東使上洛ノ事内々承候へバ、皇居ヲ遠國ニ遷シ奉リ尊雲ヲ死罪ニ行ハン爲ニテ候ナル、今夜急ニ南都ノ方へ御忍候へシ、城郭イマダ調ハズ官軍馳參ザル先ニ、凶徒若皇

居ニ寄来バ、御方防戦フニ利ヲ失ヒ候ハンカ、且ハ京都ノ敵ヲ遮リ止シガ爲、又ハ衆徒ノ心ヲ見シカ爲ニ、近臣ヲ一人天子ノ弭ヲ許サレテ山門へ上セラレ、臨幸ノ由ヲ披露候ハ、敵軍定テ叡山ニ向テ合戦ヲ致シ候ハンカ、サル程ナラバ衆徒吾山ヲ思フ故ニ、防鬪フニ身命ヲ輕シ候ベシ、凶徒力疲レ合戦數日ニ及バ、伊賀伊勢大和河内ノ官軍ヲ以テ却テ京都ヲ攻ラレンニ、凶徒ノ誅戮踵ヲ旋ラスベカラズ、國家ノ安危只此一舉ニ在ベク候ナリト申サレタリケル間、主上〇後醍醐天皇ヲイフ只アキレサセ給ヘル計ニテ、何ノ御沙汰ニモ及給ハズ、尹大納言師賢萬里小路中納言藤房、同舍弟季房三四人上卧シタルヲ御前ニ召シテ、此事如何有ベシト仰出サレケレバ、藤房卿進テ申サレケルハ、逆臣君ヲ犯シ奉ラントスル時暫ク其難ヲ避ケテ還テ國家ヲ保ツハ前蹤皆佳例ニテ候、所

謂重耳走翟、大王去幽、共ニ王業ヲ成テ子孫無窮ニ光ヲ輝シ  
候キ、兎角ノ御思案ニ及候ハ、夜モ深候ナシ、早御忍候ヘト  
テ御車ヲ差寄、三種ノ神器ヲ乘奉リ○後醍醐天皇ト三種ノ  
テ忍ビ出カマ下簾ヨリ出絹ヲ出シテ、女房車ノ體ニ見セ、主  
上ヲ扶乗セ進ラセテ陽明門ヨリナシ奉ル○後醍醐天皇ノ  
ノ違ヒケル故ニ急ニ神器ヲ相具シ先、奈良ニ志シマフナ  
リ、スベテ御計ノ違ヒケルコトハ、此ノ書ニ記セルノミニハ  
非ラズ、増鏡ニ此數ノ山ノ衆徒ハ、佛門ノ御軍ニシテ、  
イヤ、ウカカキ、フ、ム、トモ、トモ、トモ、トモ、トモ、トモ、  
ハ月廿四日あり云々今夜まで武士どももきかひあひあ  
し、と、去りてあり云々今夜まで武士どももきかひあひあ  
出させ給ふ云々今夜まで武士どももきかひあひあ  
人々あさきれい、く、や、う、み、あ、り、ぬ、む、を、う、り、  
めらむ、ん、ま、き、せ、ふ、山、へ、行、來、あ、り、て、か、り、  
を、名、し、く、の、衆、徒、も、お、具、し、君、の、法、親、の、ま、  
と、定、め、し、く、の、衆、徒、も、お、具、し、君、の、法、親、の、ま、  
て、坂、下、に、お、り、ま、り、き、ら、え、給、ふ、山、の、法、親、も、

バ、藤房季房二人御車ニ從テ供奉シタリケルガ、是ハ中宮ノ  
夜ニ紛テ北山殿へ行啓ナラセ給ゾト宜ヒタリケレバ、サテ  
ハ子細候ハジトテ御車ヲゴ通レケル、兼テ用意ヤシタリケ  
ン源中納言具行、按察大納言公敏、六條少將忠顯、三條河原ニ  
テ追ツキ奉ル、此ヨリ御車ヲバ止ラレ、怪シゲナル張輿ニ召  
替サセ進ラセタレドモ、俄ノコトニテ駕輿丁モ無リケレバ、  
大膳大夫重康、樂人豊原兼秋、隨身秦久武ナドゾ御輿ヲバ昇  
奉リケル、供奉ノ諸卿皆衣冠ヲ解テ折烏帽子ニ直垂ヲ着シ、  
七大寺詣スル京家ノ青侍ナドノ女性ヲ具足シタル體ニ見  
セテ、御輿ノ前後ニゾ供奉シタリケル、古津ノ石地藏ヲ過サ  
セ給ヒケル時、夜ハ早ホノボノト明ニケリ、此ニテ朝餉ノ供

皇仁紀傳卷之四 附錄

御ヲ進申テ、先南都東南院へ入セ給フ、彼僧正元ヨリ貳心ナク忠義ヲ存ゼシカバ、先臨幸ナリタルヲ披露セテ、衆徒ノ心ヲ窺聞ニ、西室顯實僧正ハ關東ノ一族ニテ權勢ノ門主タル間、其威ニヤ畏タリケン與カスル衆徒モ無リケリ、角テハ南都ノ皇居叶フマジトテ、翌日二十六日和東ノ鷲峰山へ入セ給フ、此ハ又餘リニ山深ク里遠クシテ、何事ノ計略モ叶フマジキ處ナレバ、要害ニ御陣ヲ召ルベシト、同廿七日潜幸ノ儀式ヲ引ツク口ト、南都ノ衆徒少々召シ具セラレテ、笠置ノ石室へ臨幸ナル南院ニハ一天皇南都へ入ラセテ、其ノ北松嶺寺ニ宿シ、平記及天正本、御叔父朝家ノ僧正ト申シ、故ハ毛利家本殿下、御息所ニテ、兼テ前大僧正ト申シ、故ナリ、東大寺別當、醍醐座主、共ニ儀ヲテ、先臨幸成テ、云々由ヲバカヤ、給ヘバ、閑ノ儀ニ忠義ヲ存セシ大儀ヲ先臨幸成テ、云々由ヲバカヤ、給元ヨリ、徒心ナク、忠義ヲ存セシ大儀ヲ先臨幸成テ、云々由ヲバカヤ、給露ヲ奉リケル、爰ニ西室顯實ハ關東ノ松嶺寺ニ族ニテ、機務ノ門主

タル間、與カスル衆徒モ無リケレバ、翌二十六日鷲峰山へ入セ給フ、此ハ又餘リニ山深ク里遠クシテ、何事ノ計略モ叶フマジキ處ナレバ、要害ニ御陣ヲ召ルベシト、同廿七日潜幸ノ儀式ヲ引ツク口ト、南都ノ衆徒少々召シ具セラレテ、笠置ノ石室へ臨幸ナル南院ニハ一天皇南都へ入ラセテ、其ノ北松嶺寺ニ宿シ、平記及天正本、御叔父朝家ノ僧正ト申シ、故ハ毛利家本殿下、御息所ニテ、兼テ前大僧正ト申シ、故ナリ、東大寺別當、醍醐座主、共ニ儀ヲテ、先臨幸成テ、云々由ヲバカヤ、給ヘバ、閑ノ儀ニ忠義ヲ存セシ大儀ヲ先臨幸成テ、云々由ヲバカヤ、給元ヨリ、徒心ナク、忠義ヲ存セシ大儀ヲ先臨幸成テ、云々由ヲバカヤ、給露ヲ奉リケル、爰ニ西室顯實ハ關東ノ松嶺寺ニ族ニテ、機務ノ門主

波羅ノ催促ニ從テ笠置ノ城ノ寄手ニ加リテ、云々九月晦日ノ事ナレバ、云々陶山ガ五十餘人ノ兵共、城ノ案内ハ只今委シク見置タリ、此ノ役所ニ火ヲ懸テハ、彼ニ聞聲ヲ上、彼ニ聞テ作テハ、此ノ櫓ニ火ヲ懸、四角八方ニ走廻テ、其勢城中ニ充満タル様ニ聞エケレバ、陣々固タル官軍共、城中ニ敵ノ大勢攻入タリト心得テ、物具ヲ脱捨、弓矢ヲカナグリ捨テ、ガケ墜共イハズ倒レ轉テ、落行ケル云々去程ニ類、火東西ヨリ吹覆テ、餘烟皇居ニ懸リケレバ、主上皇ヲ後醍醐天ヲ始進ラセテ、宮々卿相雲客皆徒跣ナル體ニテ、何クヲ指トモナク、足ニ任セテ落行給フ、此人々始一二町ガ程コソ、主上ヲ扶進ラセテ

前後ニ御供ヲモ申サレタリケレ、兩風烈シク道闇ウシテ敵ノ関聲此彼ニ聞エケレバ、次第ニ別々ニ成テ後ニハ只藤房季房二人ヨリ外ハ主上ノ御手ヲ引進ラスル人モナシ、云云  
 兎角シテ夜晝三日ニ山城多賀郡ニ〇按ズルニ山城ナル有王山〇増鏡ノ高間山ニ作ル是ナルベノ麓マデ落サセ給ヒケリ云  
 云山城國住人深須入道松井藏人二人ハ此邊ノ案内者ナリケレバ、山々峰々殘ル處ナク搜ケル間、皇居隱ナク尋出サレサセ給フ種共ニ御身ヲ當テ天皇神器ハ三主上誠ニ怖シクナル御氣色ニテ、汝等心アル者ナラバ天恩ヲ戴キテ私ノ榮花ヲ期セヨト仰ラレケレバ、サシモノ深須入道俄ニ心變ジテ、哀此君ヲ隱シ奉リテ義兵ヲモ舉バヤト思ヒケレドモ、跡ニ續ケル松井ガ所存知ガタカリケル間、事ノ漏易クシテ成難カラシム事ヲ憚テ黙止ケルコソウタテケレ、俄ノ事ニテ

網代ノ興ダニ無リケレバ、張輿ノ怪シゲナルニ扶載進ラセテ、先南都内山へ入奉ル、其體只殷湯夏臺ニ囚レ越王會誓ニ降ゼシ昔ノ夢ニ異ナラズ云云〇光明寺藏書殘篇ニ後醍醐ニ依テ、大佛貞直ノ為ニ執ラルトアテ、太平記ト辨ゼズ異ニス、而レドモ此ノ事ハ神器ニ於テ要ナシ故ニ辨ゼズ異六波羅北方、常葉駿河守範貞三千餘騎ニテ路ヲ警固仕テ、主上ヲ宇治平等院ヘナシ奉ル、其日關東ノ兩大將〇今川家本太平記、南都本太平記ニ云ク、兩京ニ入ズシテ直ニ宇治へ參大將大佛貞直金澤貞將トアリ、京ニ入ズシテ直ニ宇治へ參向テ龍顔ニ謁シ奉リ、先三種ノ神器ヲ渡シ給ヒテ、持明院新帝〇光嚴天皇ヲイフ、是ヨリ先光嚴天皇北條高時ノ奏スルニ至テ、大佛貞直金澤貞將ヲ以テ、神皇正統記ニ貞將ト作ル別人ナリ、金勝院本太平記、天平記、新帝へ傳ハ冬トアリ、貞將當時、貞冬トイヒズ、異本北條九代記、馬助貞慶元年ノへ進ラズベキ由ヲ奏聞ス、主上藤房ヲ以テ仰出サレケルハ、三種ノ神器ハ古ヨリ繼體ノ君位ヲ天ニ受サセ給

フ時、自ラ是ヲ授ケ奉ル者ナリ、四海ニ威ヲ振フ逆臣有テ、暫  
 天下ヲ掌ニ握ル者アリトイヘドモ、イマダ此三種ノ重器ヲ  
 自ラ擅ニシテ、新帝ニ渡シ奉ル例ヲ聞ズ、其上内侍所ヲ笠  
 置本堂ニ捨置奉リシカバ、定テ戰場ノ灰塵ニコソ墮サセ給  
 ヲラメ神璽ハ山中ニ迷シ時木ノ枝ニ懸置シカバ、遂ニハヨ  
 モ吾國ノ守ト成セ給ハヌ事アラジ、寶劍ハ武家ノ輩モシ天  
 罰ヲ顧ズシテ、玉體ニ近ヅキ奉ルコトアラバ自ラ其ノ又ノ  
 上ニ伏サセ給ハン爲ニ、暫モ御身ヲ放タル、事アルマジキ  
 ナリト仰ラレケレバ、東使兩人澤貞冬ヲ直金モ六波羅葉常  
 貞ヲモ言ナクシテ退出ス、翌日龍駕ヲ廻シテ六波羅ヘナレ  
 進セントシケルヲ、前々臨幸ノ儀式ナラデハ還幸成マジキ  
 由ヲ強テ仰出サレケル間、カク鳳輦ヲ用意シ袞衣ヲ調進  
 シケル間、三日迄平等院ニ御逗留有テゾ、六波羅ヘハ入セ給

ヒケル、日来ノ行幸ニ事替テ鳳輦ハ數萬ノ武士ニ打圍レ、月  
 卿雲客ハ怪シゲナル籠輿傳馬ニ扶乘セラレテ、七條ヲ東ヘ  
 河原ヲ上リニ六波羅ヘト急セ給ヘバ、見ル人涙ヲ流シ聞人  
 心ヲ傷シム云同九日〇十月九日三種ノ神器ヲ持明院新帝  
 〇光嚴天御方ヘ渡サル元〇踐祚部類鈔ニ光嚴天云云元弘  
 皇ヲイテ隨身之間不及沙汰今年十月廿五日自六波羅被  
 舊主御隨身之間不及沙汰今年十月廿五日自六波羅被  
 門東洞院内裏トアリテ、其ノ頭書ニ當日酉刻御出御六波  
 羅行啓壽永御例也、不載關白事、新主御出御六波羅被  
 天有皇詔壽永御例也、不載關白事、新主御出御六波羅被  
 由有御勅被仰藏人又所アト雖ヘ内侍所御候前如元九  
 日ト有御勅被仰藏人又所アト雖ヘ内侍所御候前如元九  
 皇ノ神器ヲ光嚴天皇傳ヘラレシト雖ヘ内侍所御候前如元九  
 モ異ナルコト無レ然レドモ是レ時六波羅ノ鎮將北條仲時  
 北條時益ヲ以テ傳ヘシメ後醍醐天皇ノ御璽ヲ傳ヘラレシ  
 非ラズ事ハ次ニ辨ズ、又後醍醐天皇ノ御璽ヲ傳ヘラレシ  
 日ハ九日ニモテ六日ナリ  
 二モ非ラズニテ六日ナリ

劔璽渡御記 元弘元年十月六日今日劔璽自六波羅亭可有  
 渡御禁中、可參向之由蒙催問、未刻許先參仙洞、東帶如常猶白

皇位繼承篇 附録

處無祇候、行事辨房光、奉行職事定親等同祇候、酉半刻兩人相領狀、祇候、行事辨房光、奉行職事定親等同祇候、酉半刻兩人相伴參向六波羅南方、於釘貫外○釘貫門ノ下車入棟門昇中門廊相續實繼朝臣李隆等參各徘徊廊邊奉守護之武士此間下地敷敷皮群居隆陰尋武士云、劔璽有御座于何處哉御座于此簾中云與先帝皇一後醍醐天御座之屋隔五六間也中間廊南候其砌重尋云簾中猶有人哉答云無人云云然者已臨昏無覺束、可上簾歟、定親卷之、先是大藏省所進之新造辛櫃杉白木也白木初網、昇居簾前、端蠟燭武士持參小時上卿參議參仕云云、此間檢知劔璽是文治例也、職事許可檢知之處、日來強委不見知之、間實繼朝臣召加之、故○職事定親審カニ劔璽ヲ見知ラズ、重ヲ見知リタル者ナルベシ、而レモ實繼時ニ職事ニ非ラズ、辨テザリシ者歟、又時方ニ夜ナリ者歟、定親差蠟燭隆陰實繼朝臣等檢知之、此屋中央間重疊五帖、其上置御冠宮臺、其上置

檜物櫃二合、一尺餘、歟、各結緒、加封、長、下居臺開蓋見知之、無破損之儀歟、如元結緒還出、次上卿參議辨降立地去砌五許文隆陰定親候、砌邊實繼朝臣李隆等自砌參進乍納櫃、取之出弘庇入辛櫃省掌兼先劔璽實繼朝臣次璽李隆劔櫃長不入辛櫃四寸餘出、可取出歟之由人々稱之、然而下櫃納之條已先例也、聊餘出之條有何事哉之由申了、劔櫃上置璽櫃也、省掌如元覆蓋昇之、兩將下地隆陰非可供奉之間、馳車參儲禁裏便參仙洞尋申八御前奉執柄令候朝餉給、漸々近付給歟之由申八、被仰云於門外可申事由文治見俊經仍可存其旨之由差出納親景仰定親了、亥刻許已令到門前云云、主上皇光嚴天出御中門廊密々御見物、執柄被候御供隆陰同祇候、定親立門下申事由、藏人少納言親名出逢奏聞歸出此時帶仰可奉入之由、入中門經南庭奉入直廬上卿參議辨留中門外昇居南面綠端開蓋實繼朝臣置干長

自槍物櫃取出劔持之、季隆同取出璽持之、經堂上奉入御殿供  
 前道後隆蔭親名定親候御供、内侍二人候御帳左右受劔璽  
 入内、兩將退出○此ノ事ヲ記劔璽ノ渡御ヲモ寶鏡モ同日寶鏡ノ渡  
 七日ナドニ渡御アリ、上リテナラシ、而レ御類ノ事ヲ詳ナラズ御  
 アリ、而レドモ其ノ上リテ五字ノ神祇三種共ニ六波羅ニ於テ  
 ムベシ、而レドモ其ノ上リテ五字ノ神祇三種共ニ六波羅ニ於テ  
 渡サレシ、而レドモ其ノ上リテ五字ノ神祇三種共ニ六波羅ニ於テ  
 へテ知ルベシアルハ、太平記ニ三種ノ神祇三種共ニ六波羅ニ於テ  
 皇年代略記 光嚴院云 元弘元年辛未九月廿日 癸踐祚十九  
 太上太皇詔命、于時劔璽、十月六日渡劔璽、自六波羅奉渡土御門  
 東洞院皇居、或說神璽聊有子細云云○神璽聊有子細トイハ  
 非ラザルコトノ風説ノアリケルハ、神璽ハ真ノ神璽ニ  
 ルヲ、斯ノ如クハ記セルナリケルハ、神璽ハ真ノ神璽ニ  
 太平記卷四 明レバ三月七日 月○元弘二年三月三日 千葉介貞胤、小  
 山五郎左衛門佐佐木佐渡判官入道道譽五百餘騎ニテ路次  
 ヲ警固仕テ、先帝ヲ隱岐國へ遷シ奉ル供奉ノ人トテハ一條

頭太夫行房、六條少將忠顯、御介錯ハ三位殿御局計ナリ、其ノ  
 外ハ皆甲冑ヲ鎧テ弓箭ヲ帶セル武士ドモ、前後左右ニ打圍  
 ミ奉リテ、七條ヲ西へ東洞院ヲ下へ御車ヲ輶レバ、京中貴賤  
 男女小路ニ立並テ、正シキ一天ノ主ヲ下トシテ流シ奉ル事  
 ノ淺マシサヨ、武家ノ運命今ニ盡ナント憚ル處ナク云聲巷  
 ニ滿テ只赤子ノ母ヲ慕フガゴトク泣悲ケレバ聞ニ哀ヲ催  
 レテ警固ノ武士モ諸トモニ皆鎧ノ袖ヲゾヌラシケル○後  
 天皇隱岐ノ國ニ遷幸ノ時、此ノ事ハ次ニ神璽ヲ奉戴セシコト  
 遷幸ノ人コレヲ知ラズ、此ノ座ニ御座アリシ、其ノ間ノ事ハ、神璽  
 傳來ヲ論スルヨリ、彼ノ國ニ御座ニ御座アリシ、其ノ間ノ事ハ、神璽  
 村等後醍醐天皇ノ御詔ヲ奉ジ、六波羅ヲ嚴天擊シ、遂ニ上皇ニ  
 六波羅ノ鎮北條ノ御詔ヲ奉ジ、六波羅ヲ嚴天擊シ、遂ニ上皇ニ  
 上皇、皇太子康仁ヲ奉ジ、東國ニ益々時益々上皇ニ花園  
 テ死ス、龜山天皇ノ第五皇子、其ノ時益々上皇ニ花園  
 番馬ニ邀撃トモ、亦此ニ殺シ、近畿故ニ省略ス、為テ仲時ヲ近  
 同書卷九 去程ニ五宮ノ官軍共、主上皇ヲ光嚴天上皇見○後伏

花園天皇ヲ取進ラセテ其ノ日先長光寺へ入奉リ三種ノ神  
 器此ニ三種トアルハ誤ニテ是ノ時五宮へ渡サレハ寶  
 ナリ事ハ次並ニ玄象下濃ニ間ノ御本尊ニ至マテ自ラ五宮  
 下ニ辨ズハ渡サレケル泰子嬰漢祖ノ為ニ亡サレテ天子ノ  
 重符ヲ頸ニ懸白馬素車ニ乗テ軹道ノ傍ニ降り給ヒ亡泰  
 ノ時ニ異ナラズ皇年代略記ニ元弘三年三月十二日西院  
 同十日遷御伊吹山太平護國寺上皇廿八日還幸京師云  
 五月廿八日及後伏見花園ノ二上皇ノ京師ニ還幸アリシハ  
 日ナリ

皇年代略記 後醍醐院云正慶二年酉癸閏二月廿四日慶  
 三年ハ即元弘密出御隱州謫處幸伯州大山寺四月十五日彼  
 寺赴御帝都六月四日寅着御東寺為西院六月五日卯還幸二  
 條富小路殿復皇位詔去々年己來任官以下勅裁悉可停廢  
 賢所寶鏡豫御座禁中去五月八日頭中将源忠顯舍伯州詔

命奉迎之案申禁中七日夕三主皇光嚴天皇ヲイフ御没落  
 之時為女官沙汰奉入權大納言公宗卿北山第自彼第奉入禁  
 中也鏡ハ元弘三年六月五日後醍醐天皇御座アリシコトハ皇  
 代略記ノ文ニテ詳ナリ寶鏡ト偽神トハ龜山天皇ノ五宮  
 ヲリ必進ノ獻セテ詳ナリ其ノ故ハ上文ニ引ク所ノ御本尊  
 記ニ主上皇自ラ御方ヘ渡サレケルトアルヲ合考シ  
 テ知ルマテ皇自ラ御方ヘ渡サレケルトアルヲ合考シ  
 増鏡の花 みやろろハ伯耆よりノ遷御と云世の中ひしめ  
 くとまが東寺へりてせ路ひて事ども宣めらるる二條此第のお  
 と道ゆりあまきり路へりあたみ内裏へ入とせ路あべ  
 き故重祚あまきりある御をともも雲の糸をゆりまるとら  
 きたれバ三種ノ神器ノ中ニ獨神璽ハ後醍醐天皇ノ玉體  
 ハ偽神器ナルコト明瞭ナリたが遠き行幸の遠涉の式あり  
 所るべきこと云云 六月五日東寺より常の行幸の



武二年八月足利尊氏反シテヨリ以来干戈戦ラズ後醍醐天皇爲ニ龍蹕ヲ再タビ比叡山ニ移ス事ハ神器ノ傳來ヲ論ズ故ニ略ス

太平記卷十七 懸ル處ニ内々使者ヲ主上ニ使者ヲ後醍醐天皇ニ進ララスハ進ラセテ申サレケルハ云々主上是ヲ尙覽アリテ告文ヲ進ラスル上ハ偽テハヨモ申サジト思召ケレバ、傍ノ元老智臣ニモ仰合サレズ、臆テ還幸成ベキ由ヲ仰出サレケリ、云 義貞朝臣懸ルコト、ハ知給ハズ參仕ノ軍勢ニ對面シテ事無キ様ニテオハシケル處へ洞院左衛門督實世卿ノ方ヨリ、只今主上京都へ還幸ナルベキトテ供奉ノ人ヲ召候、御存知候ヤラント告ラレタリケレバ、義貞サル事ヤアルベキ、御使ノ聞誤ニテゾ有ラントテ、最駭ガレタル氣色モ無リケルヲ、堀口美濃守貞滿聞モ敢ズ、江田大館が何ノ用

トモナキニ、此曉中堂へ參ルトテ登山仕ルガ怪シク覺候、貞滿先内裏へ參テ事ノ様ヲ見奉リ候ハントテ、郎等ニ著セラレタル鎧取テ肩ニ投懸、馬ノ上ニテ上帶ヲレメ諸鎧合テ參セラル、皇居近ク成ケレバ、馬ヨリ下リ堦ヲ脱テ中間ニ持セ四方ヲキツト見渡スニ、臨幸只今ノ程ト見エテ、供奉ノ月卿雲客衣冠ヲ帶セルモアリ、イマダ戎衣ナルモアリ、鳳輦ヲ大床ニ差寄テ、新典侍内侍所ノ櫃ヲ取出シ奉レバ、頭辨範國劔重ノ後ニ從テ、御簾ノ前ニ跪クハ○此ニ大床ニ取出シタル所下ニ辨ズ貞滿左右ニ少揖シテ御前ニ參リ、鳳輦ノ轅ニ取附淚ヲ流シテ申サレケルハ、還幸ノ事兒女ノ説幽ニ耳ニ觸候ツレドモ、義貞存知仕ラヌ由ヲ申候ツル間、傳説ノ誤カト存ジテ候へバ、多年ノ粉骨忠功ヲ思召捨ラレテ大逆無道ノ尊氏

ニ叡慮ヲ移サレ候ケルゾヤ云 忿ル面ニ涙ヲ流シ理ヲ碎  
 テ申ケレバ、君モ御誤ヲ悔サセ給ヘル御氣色ニナリ、供奉ノ  
 人々モ皆理ニ服シ義ヲ感ジテ、首ヲ低テグ座セラレケル後○  
 醍醐天皇新田義貞等ヲ諭シ、恆良親王ヲシテ北國へ下向セ  
 用無シ、故スニ 佐ケシムル事ハ、神器傳來ヲ論ズルニ  
 此ニ省略ス 醍醐天皇ノ比叡山ヨリ京師へ還幸スルヲ  
 同書 還幸イフ、時ニ建武三年ヲ改メテ延元元年トイヒ、  
 ノ其コトナリ 既ニ法勝寺マデ近ヅキケレバ、左馬頭直義五  
 百餘騎ニテ參向シ、先三種神器ヲ當今皇○光明天ノ御方へ渡  
 サルベキ由ヲ申サレケレバ、主上兼テヨリ御用意有ケル似  
 セ揚ヲ取易テ、内侍ノ方へグ渡サレケル ○本書ニ直義法勝  
 ノ神器ヲ後醍醐天皇ニ乞申ストアルハ、非ナリ、皇年代略記  
 ニ光明院云、建武元年八月十五日、踐祚云、十一月、月二日、  
 所、劍、渡、御、自、花、山、院、被、渡、東、寺、行、宮、下、見、沙、汰、今、年、十、月、自、花、  
 明、院、云、劍、御、自、花、山、院、被、渡、東、寺、行、宮、下、見、沙、汰、今、年、十、月、自、花、  
 山、院、第、出、此、自、山、門、被、渡、見、エ、タ、リ、是、等、ノ、代、替、ニ、據、テ、後、醍、醐、天、  
 月、二、日、賢、所、已、下、渡、御、ト、見、エ、タ、リ、是、等、ノ、代、替、ニ、據、テ、後、醍、醐、天、

皇ノ偽神器ヲ光明天皇ニ渡サレレハ  
 延元元年十一月二日ト決スベシ  
 同書卷十八 主上ハ重祚ノ御事相違候ハジト、尊氏御様々  
 申サレタリシ偽ノ詞ヲ御憑有テ、山門ヨリ還幸成シカドモ、  
 元來謀リ進ラセン為ナリシカバ、花山院ノ故宮ニ押籠ラレ  
 サセ給ヒ、宸襟ヲ蕭颯タル寂寞ノ中ニ悩サル云 刑部大輔  
 景繁武家ノ許ヲ得テ只一人伺候シタリケルガ、勾當内侍ヲ  
 以テ潜ニ奏聞申ケルハ云 天下ノ反覆遠カラジト謳歌ノ  
 説耳ニ滿候、急ギ近日間ニ夜ニ紛レテ大和ノ方へ臨幸成候  
 テ、吉野十津川ノ邊ニ皇居ヲ定ラレ、諸國へ綸旨ヲ成下サレ、  
 義貞ガ忠死ヲモ助ラレ皇統ノ聖化ヲ耀サレ候ヘカシト、委  
 細ニゾ申入タリケル、主上皇○後醍醐天事ノ様ヲ具ニ聞召レ、  
 サテハ天下ノ武士猶帝德ヲ慕フ者多カリケリ、是天照太神  
 ノ景繁ガ心ニ入易ラセ給ヒテ、示サル、者ナリト思召レケ

レバ、明夜必察ノ御馬ヲ用意シテ、東ノ小門ノ邊ニ相待ツベシトゾ仰出サレケル、相圖ノ刻限ニ成ケレバ三種ノ神器ヲバ新勾當内侍ニ持セラレテ、童部ノ踏アケタル築地ノ崩ヨリ、女房ノ姿ニテ忍出サセ給フ、景繁兼テヨリ用意シタル事ナレバ、主上ヲバ察ノ御馬ニカキ載進ラセ、三種神器ヲ自荷擔シテ、イマダ夜ノ中ニ大和路ニ懸リテ、梨間宿迄ゾ落シ進ラセケル、白晝ニ南都ヲ如此ニテ通ラセ給ハ、人ノ怪シメ申事モコソアレトテ、主上ヲ怪シゲナル張輿ニ召替サセ進ラセテ、供奉ノ上北面ドモヲ輿舁ニナシ、三種ノ神器ヲバ足附タル行器ニ入テ、物詣スル人ノ破籠ナド入テ持セタル様ニ見セテ、景繁夫ニ成テ是ヲ持テ、何レモ皆習ハヌ業ナレバ、急グトスレドモ行ヤラデ、其日ノ暮程ニ内山迄ゾ着セ給ヒケル云々程ナク夜ノ曙ニ、大和國賀名生ト云所ヘゾ落着セ

給ケル

神皇正統記

同十二月

延元元年

小忍びて都を出ま

て○後醍醐天皇ノ花山院河内北國小正成といひ一ガ一族

をめぐ具々芳野小正成といひ行宮をつくりて後とせ

つらせ給ひ、神皇正統記に記す、御子奇特の事

ふこそ侍り、三種神器ヲ奉具足、吉野山へ入セ給テ、同十二月ニ

後醍醐天皇延元元年十二月奉具足、吉野山へ入セ給テ、同十二月ニ

野記ニ身入部氏ノ家譜ヲ引テ云ク、此遷幸の時、途の宿

の害をおやぶる世に、密に御子奇特の事、御子奇特の事

が子石見守清盛、小正成、小正成、小正成、小正成、小正成

お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛

の時、石見守清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛

卒らるる、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛

右記の行宮、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛、お清盛

て清華ヲ女ヲ新由傳上ひふりあさせたり云々此身人教と  
 のふら今歩進身者を水口と稱ふ其分古き家法の子  
 化せり越ゆるは口禮賢物ハ初見えたり此二并依法の子  
 て失ふを世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 時ハ世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 りるを父の世名に臨みたりしやまかひき世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 子國ハ世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 へくを父の世名に臨みたりしやまかひき世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 かゝるを父の世名に臨みたりしやまかひき世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 ありの世に實ハよくあらしめて依法を道世に出るは  
 神器ハ後醍醐天皇コレモ此ノ事他ハ所見無シ因テ三種ノ  
 セタマハ後醍醐天皇コレモ此ノ事他ハ所見無シ因テ三種ノ  
 皇後龜山天皇ノ二世相續デ  
 コレヲ傳フ事ハ次下ニ辨ズ  
 太平記卷三十 足利宰相中将義詮朝臣ハ云々一旦事ヲ謀  
 テ姑ク洛中ヲ無為ナラシメン爲ニ吉野殿皇ヲイフ上天へ使  
 者ヲ立テ自今以後ハ御治世ノ御事ト國衙ノ郷保并ニ本家  
 領家年來進止ノ地ニ於テハ武家一向其イロヒヲ止ベキニ

テ候只承久以後新補ノ卒法并ニ國々ノ守護職地頭御家人  
 ノ所帶ヲ武家ノ成敗ニ許サレテ君臣和睦ノ恩惠ヲ施サレ  
 候ハ武臣七徳ノ干戈ヲ戢テ聖主萬歳ノ寶祚ヲ仰奉ルベシ  
 ト頻ニ奏聞ヲゾ經ラレケル○園大督及東寺長者補任ヲ按  
 アリシトキ既ニ此ノ謀ヲ爲シナリ太平記ニ義詮ガ謀ト爲  
 ス者ハ非ナリ而レドモ此ノ事ヤ神器ノ傳來ヲ論ズルニ於  
 テハ妨アルニ非ラ 是ニ依テ諸卿僉議有テ云々御合體ノ事  
 ズ故ニ辨明セズ 是ニ依テ諸卿僉議有テ云々御合體ノ事  
 仔細アラジトゾ仰出サレケル云々憂カリシ正平六年〇觀  
 リナノ歳晩テアラタマノ春立ヌレドモ皇居ハ猶モ山中ナ  
 レバ白馬踏歌ノ節會ナンドハ行ハレズ云々二月廿六日主  
 上〇後村上天巳ニ山中ヲ御出有テ瑤輿ヲ先東條へ促サル  
 叙璽ノ役人計衣冠正シクシテ供奉セラレ其外ノ月卿雲客  
 衛府諸司ノ尉ハ皆甲冑ヲ帶シテ前騎後衆ニ相從フ云々皇  
 居ハ當社神主津守國夏ガ宿所ヲ俄ニ造易テ臨幸ナシ奉リ

ケリ云々○後村上天皇北畠顯能等ヲ近江ニ逃ル義詮ヲ京師  
修テ此日記、東寺三種ノ補任等ニ載スル所モ亦太平記ニ同ジ而  
ス

同書 去程ニ敵ヲイ義詮ハ都ヲ落タレ共吉野帝皇○後村上天

ハ洛中へ臨幸モナラズ、只北畠入道准后顯能卿父子計京都

ニオハレテ諸事ノ成敗ヲ司リ給ヒテ、其外ノ月卿雲客ハ皆

主上皇○後村上天ノ御座ニ附テ、八幡ニカ伺候シ給ヒケル、同

廿三日中院中将具忠ヲ勅使ニテ、都ノ内裏ニオハシマス三

種神器ヲ吉野主上へ渡シ奉ル○本書ニ崇光天皇正平七年

神器ヲ後村上天皇ニ渡シ奉ルハ次下誤ニテ、正平六年十二月

偽神器ヲ以テ渡サレシナリ、事ハ次下誤ニテ、正平六年十二月

園太督 正平六年十一月八日大判事明成来云、南山武家合

體治定、隆資卿實世卿出京、可沙汰京都事云云、二十四日入夜

頭中将具忠○中院具忠ハ太平記モ亦同シ師ニ為南方御使来

率軍士ニ予出會謁之、世上事去春以来事演説、今度尊氏卿懇

切有申旨間恩免畢、天下事可被聞召之旨申之、雖可有御出京、

北國東國未静謐之上、今年為塞方、仍明春可有出御、其間條々

御事書以下傳宣之、十二月二十三日叙重内侍所被渡云云○崇

光天皇ノ三種ノ偽神器ヲ、後村上天皇ニ奉還セシ、但シ中院

具忠勅使トシテ、太平記ノ吉野ニ奉送セシ、正月五日今日於南方御

所被行叙位云云○ハレシ平七年モ、偽神器ハ吉野ニ於テ叙位ヲ行

テ見ルコト以

太平記卷三十 正平七年 云々 閏二月 云々 二十三日中院中

將具忠ヲ勅使ニテ、都ノ内裏ニオハシマス三種神器ヲ、吉野

ノ主上へ渡シ奉ル○正平七年閏二月廿三日偽神器ヲ、南方

辨セルガ如シ、皇年代略ニ奉ルトアルハ、非ナルコト被渡内

侍所并神璽於南方ト見云、紹運錄モ亦正平六年十二月廿三日

日ト是ハ先帝皇後醍醐天皇山門ヨリ武家へ御出シ有レ時、ア  
 為ス皇ヲイフ天ヘ渡サレタリシ  
 リモアラヌ物ヲ取替テ、持明院殿皇ヲイフ天ヘ渡サレタリシ  
 物ナレバトテ、璽ノ御箱ヲバ棄ラレ、寶劔ト内侍所トヲバ近  
 習ノ雲客ニ下サレテ、衛府ノ太刀装束ノ鏡ニグ成サレケル、  
 實モ誠ノ三種神器ニテハナケレ共己ニ三度大嘗會ニ逢テ、  
 毎日ノ御神拜清暑堂ノ御神樂二十餘年ニ成ヌレバ、神靈モ  
 ナドカ無カルベキニ、餘ニ恐ナク凡俗ノ器物ニ成サレヌル  
 事、如何アルベカラント申ス族モ多カリケリ光天明天皇ノ二代崇  
 相傳ヘタマヒシ所ノ偽神器ハ、是ニ至テ皆弁ラレシコト此  
 ノ文ニ據テ瞭然タリ、但偽神器ヲ弁ラレシ事ハ正平七年閏  
 ノ月ニハ非ラズシテ、正平六年十二月同廿七日閏二月廿七  
 日ナ北畠右衛門督顯能兵五百餘騎ヲ率シテ持明院殿へ參  
 リ云々四條大納言隆蔭卿ヲ以テ、世ノ靜リ候ハン程ハ、皇居  
 ヲ南山ニ移シ進ラスベシトノ勅詔ニテ候ト奏セラレケレ

ハ、兩院明光嚴天皇光主上皇崇光天皇東宮直仁親アキレサ  
 セ給ヘル計ニテ、兎角ノ御言ニモ及バヌ云々御車ヲ二兩差  
 寄餘リニ時刻移候ト急ゲバ、本院皇光嚴天新院皇光明天主  
 上皇崇光天春宮直仁親御同車有テ南ノ門ヨリ出御ナル  
 ○正平六年足利尊氏崇光天由テ廢ス而シテ後村上天皇コ  
 レ皇太子上天皇ノ号ヲ加フ此皇由廢ス而シテ後村上天皇コ  
 天略記ニ光嚴光明崇光天三皇由廢ス而シテ後村上天皇コ  
 代略記ニ光嚴光明崇光天三皇由廢ス而シテ後村上天皇コ  
 院略記ニ光嚴光明崇光天三皇由廢ス而シテ後村上天皇コ  
 器ヲ後村上天皇ニ奉還シテ後吉野ノ興賀名生ニ遷御ノ神  
 一ハ神故ニ傳來ニ省略スルテ後吉野ノ興賀名生ニ遷御ノ神  
 同書卷三十一三月十五日正平七年三月ヨリ軍始リテ足  
 利義隆兵ヲ起シテ後村上天皇已ニ五十餘日ニ及ベバ、城中  
 二ハ早兵糧ヲ盡シ援ノ兵ヲ待方モナシ、角テハ如何有ベキ  
 ト云明程コソアレ、聽テ人々ノ氣色變テ、只落支度ノ外ハス  
 ル態モナシ、去程ニ是ゾムネトノ御用ニモ立ヌベキ伊勢、矢



上下敗北之人々被過南都、或又有構赴東條、然而南都實事云  
 云〇後村上、天皇初東條ヲ過サセタマヒシトイフ風説ハ有  
 決シ今朝自八幡到來首等今朝泉六條河原云云、又四條一品  
 隆為赤松被討取首同取之、十五日聞南都實遍僧都送状云、去  
 十二日主上令過南都、給於招提聊供御茶、令過宇智郡方給、無  
 追懸之輩云々、十七日南都飛脚到來臨幸式委申之、主上覺敷  
 御事、裼鎧直垂被混軍士、但聊分別申、篇者御鞍前輪程新葛宮  
 一被附之附緒、若是神器、類乎云云、〇後村上、天皇八幡ノ行宮  
 還幸アリシコト、此ノ文ニ據テ見ルベシ、又内侍所ハ大井長  
 重守護シテ賀名生ノ皇宮ニ獻ゼシコトハ伯耆卷ニテ瞭然  
 ルベシ、神靈ハ天皇親奉ルニ實ハ史冊ニ載セズトイヘドモ、而  
 ドモ亦天皇親奉ラ戴シマヒテ、元中九年ニ至ルマデノ  
 後、後龜山天皇親奉ラ戴シマヒテ、元中九年ニ至ルマデノ  
 ノ問ハ、神無シ、故ニ省略ス  
 皇年代略記 後小松院云々 明德三年 〇明德三年八月即閏十  
 元中九年ナリ

月三日南方主 皇〇後龜山天皇 令和睦遷御于大覺寺 令駕鳳三種  
 神器同渡御、同五日神器等奉渡于里内 〇土御門東洞院 〇本書  
 ハ誤ニテ、閏十月ニ 〇足利義申沙汰、〇南方後  
 續神皇正統記 明德三年大樹滿ヲイフ申沙汰、〇南方後  
 龜山天皇 涉和睦の事あり、三種神器歸座ありべき所をり  
 フイフ 〇とよこそ、元暦内侍所西海より渡渉の例に似せらる、日野  
 中納言資教仰大納言子任トクヤ沙汰、十月廿五日陣子  
 日時を被敷、閏十月二日南主夜子入テ涉入洛、直子塔峨大覺  
 寺渡渉、沙引直衣腰裏子駕渡、駕輿丁涉與長あども沙汰、獻  
 せらる、去月廿八日南山院所を出給、以テ、奈良を経ま、  
 今日二日洛京着、供奉人大略戎衣鎧直垂あり、関白殿とリヤ  
 ハ涉直衣なり、内侍所涉先行、七日片時、の涉行振あがら、當朝  
 兩主の涉威儀とせめぐららるる所事、とくは、同日陳定



〇因五日三種靈寶内裏土御門中渡河、最重の御儀式にて  
 ぞ中々、今度御合葬のこと宮りさるる、多沙英徳の像も  
 有りけるもや、とまじかたのまれ靈寶御座も、と小聖代の  
 志る、も何とせ、若歳の寶祚ハ孫たのもしうぞ侍る  
 年即明德三年、後龜山天皇讓位ノ儀ヲ以テ、三種ノ神器ヲ後  
 小松天皇ニ傳ヘシコトハ、此文ニ據テ其ノ大略ヲ了知ス  
 ルニ足ル、後龜山天皇ノ讓位ノ儀ヲ用テレコト、又後龜山  
 ハ、巴二讓位ノ條、下ニ辨ジタリ、且シク合觀スベシト、此ノ  
 天皇京師ニ還幸ノ日モ亦、閏十月二日ノ夜、ナルコト、此ノ  
 二據テ決スベシ、東ノ寺王代記ニ明徳三年閏十月二日、南朝御  
 入洛着御于大覺寺三種神器御隨身同五日三種神器被渡入  
 内裏上御日野前大納言資教卿參議平宰相知輔朝臣三ケ日  
 御神樂等被行ノ見工皇代曆、後小松天皇ヨリ稱光天皇ニ  
 日ト為ス、亦以テ徴ト為スベシ、後小松天皇ヨリ稱光天皇ニ  
 至テ二代ハ神器ニ變アリ、次下ニ辨ズ  
 天皇ニ至テ神器ニ變アリ、次下ニ辨ズ  
 看聞御記 嘉吉三年九月廿三日晴 云 暮程より世間物念  
 自管領相觸軍勢共烏丸殿へ馳參、野心之穿人可推參云云、實  
 說不分明仍用心男共參候、禁中ニハ當番不參、入夜按察參云

云、無御用心之儀、夜半許猥雜焼亡云云、〇燒亡ハ失火アリ有俊  
 朝臣告之、予平卧起出之處禁裏云云、寢殿へ走出見之、已清凉  
 殿炎上仰天失心神、大事之本尊樂器等欲運出、御乳人走来申、  
 惡黨三四十人許、清凉殿へ亂入常御所へ入、御所様〇後花園  
 未成御寢、親長季春御前祇候、晝御座御劔被召議仗所へ  
 逃御、大納言典侍取劔璽逃出之處凶徒奪取、無力被取、女中  
 右往左往へ逃出、御乳人〇小袖と〇逃、御所様御行衛  
 之不知之由泣々申、心神惘然失東西、有俊朝臣忿他所へ可有  
 御出之由申之間、兼與東門より逃出、宮御方女房之様もて歩  
 行、若宮二條奉抱、御喝食兩所南御方女中走出、男共御共持經  
 朝臣宿所へ行、留守之御所も大勢馳參、警固騷動凡無言計  
 而内侍所渡御之由申、彌仰天、刀自奉取出、三條青侍三井奉昇  
 出之由刀自申、庭上奉居、恐之間、構高御座奉居、予下庭奉拜兵

部卿衣冠 參御行衛も不存知之由申、暗然之外無他、此旅宿も怖畏之間、宮御方若宮二條御乳 定直宿所へ奉成、隆富持經等朝臣御共參密儀也、主上皇 後花園天陽明忠 近衛前關白へ臨幸云云、又無其儀之由申、實説不分明、内侍所御迎、武家奉行共參之由申、若惡黨為取奉如此申、歟不審之間無左右、不可渡之由數問答、自三條御迎、被參、可奉渡之由令申、奉行三條令申、歟、公綱朝臣直 參、奉行人御迎、可參之由被申、遲參之間内へ入、閑談、天明以後奉行數輩、警固二百餘人帶甲 參、陽明前關白忠 可奉成之由申、其時御座治定皇 後花園天陽明御無事 有俊朝臣同 公綱朝臣同 重賢朝臣同 極薦源定仲束帶 供奉非常之儀不及先例沙汰者哉、臆面々歸參内侍所 送ルニテ歸參也、中門も御座云云、玉躰皇 後花園天安穩賢所無為

渡御、亂中之大慶也、内裏殿々悉炎上、四足門東門二殘餘 炎不樂器名器和哥以下雜抄、御具足雜物等悉灰燼云云、燒亡時分諸大名侍所等一人も不馳參、公家人も不參、尤不審也、主上をむ、李春おが、奉、高名忠節不堪感悦者也、天明以後予女中本所へ歸、留守も伊成永範僧侶等濟々祇候、廿四日晴至、夜雨降去、夜事委細間、凶徒清凉殿も亂入、先劔璽奪取、已劔璽ハ奉取ぬ可付、火之由下知、殿々放火、御所様議仗所へ御逃ありと殿上之後へ出御、親長李春太刀を抜て凶徒を打拂て、おが、奉、御冠ヲ脱て女房躰も、唐門より逃出御、御供李春一人候、親長ハ惡黨ハ押隔らむて行方不見、裏辻宰相家へ入御、其より廣橋中納言家へ渡御、自彼密々御輿も、陽明へ臨幸云云、隱密之間公家人誰も不參、賢所渡御之後露顯、女中も方々より參入云云、此式御乳人語云云、抑南方謀反大將源尊秀、

其外日野一位入道〇有光與力之惡黨數百人、山上へ登て山〇山上即此處奉成臨幸之由披露、中堂〇閉籠三千之衆徒を相語之由、山門使節注進、此外公家人諸大名〇細川同心廻文子加判形云云、已天下大亂言語同斷之次第也、管領〇畠山持山門使節〇急速可誅罰之由加下知云云、公家〇より被成綸旨、朝敵可追討之由、山門へ被仰綸旨云云、草萬里小路大納言書之、上下周章仰天之外無他、日野一品禪門謀叛意趣何事乎、息女權典侍禁中祇候旁不思議事也、此外公家人同心云云、〇其不及謂山名野心日來風聞之間存内也、細川も同心、山名縁者之間無不審、凡物言繁多、是へ去夜惡黨一手欲亂入而失方角不參之由、後〇聞幸運之至、供神明佛陀加護也、老後運命相殘喜悅千万也、伏見地下人召寄大勢參警固、奉公侍臣僧侶等悉參集具足方々預遣纏頭、周章中々無是非、廿五日兩降云々、廿六日

晴、以定直管領〇畠山持へ警固被進、日出悦入之由、令申返事被申〇管領畠山持國〇後崇抑山門之凶徒、昨夕追落〇或討死或生捕之由、此曉注進、早速誅罰殊重無極、仍内裏へ以重賢朝臣進御、烏丸殿へ進、太刀付三條如例、其後山門重注進、南方人主と稱する人〇法師僧躰之宮〇尊義王ヲイフ尊日野一品禪門以下凶徒討取其頭〇上洛、少々没落云云、中堂も不焼山徒致忠節之由申、早速落居供神明加護且聖運之至喜悅無比類者也、人々參賀云々、抑書程二日野一品禪門子息右大辨宰相資親卿於路頭被召捕、家人侍共同搦取猥雜也、管領仰付云云、逆臣忽蒙天罰之條不義之因果顯然也、資親卿子息小冠〇顯被召捕云云、但不分明、廿七日云々、廿八日晴、資親卿於六條河原被刎首、其外召人五十餘人被斬、南方於山門侍等至夜寶劔渡御、真之寶劔無子細、錦袋被入、清水法

印奉之御堂中の捨置云云、状を書々へく棄其状云、  
大内の三種神器もて候、返し申させ候へらく、あらくせと  
れ候く罰あてらせ候まじく候

状如此誰人所為哉不思議事也、清水法師雖可被究明、先執進  
被感仰可有勸賞之由被仰云云、何様も出来天下大慶也、神  
璽未出来被尋求云云、定可出来歟、聖運顯然之上者有憑、廿九  
日晴寶劔出来珍重之由闕白以下參賀、此方へも三條已下賀  
申云々抑去廿三日伊勢神馬逐電或説山中を翌日廿四日歸  
来、以外窮屈之躰也汗をむく此由注進、炎上之間神明入浴  
被擁護申之條顯然也、玉體安穩真實加護之至也云々○本書  
璽ノ所在ヲ知ラザル趣ナレドモ、神璽ハ尊秀王コレヲ奉  
戴シテ吉野ノ奥北山庄ニ逃レシナリ、事ハ次下ニ辨ズ  
續神皇正統記 嘉吉三年九月廿三日今夜凶族内裏へ乱  
入く、一月ハ清涼殿の入り、一月ハ局所より改入て放せ

もむ、長刀を持たる者玉體を危きとせしむ、同日もむ  
けりやらんをどりのきくあろびたりしひまのむせ出給ふ  
とくや、密に近衛右殿下北第の行幸、劔璽ハ凶徒棄たり給ふ、  
内侍所所幸櫃ハ東門役人佐木里四のり出給ふ、  
辛櫃ハ、刀自某ト三條ノ侍某ト昇出レ奉リケルヲ、黒田判官  
其受取テ、後崇光院上皇ノ假ニ御座アル持經朝臣ノ第へ奉  
送セシナリ、此ノ條且シク大也より凶徒ハ凶門の取上て子  
看間御記ト參觀スベシク、大也より凶徒ハ凶門の取上て子  
細を謀送と、南方北宮と取立申儀也云々○此宮ハ多壽寺の傍  
ルハ、即小倉宮良泰親王ノ子ニシテ空圓トイフ者ナリ、万壽  
寺ノ僧孤海ノ弟子ト為リ、金藏主ト号ス、還俗シテ尊義王ト  
イフ、天根元盛代圖ニ嘉吉三年癸亥九月廿三日、野殿謀  
反禁裏へ夜討放火籠帝一族取立テ、金藏主ヲ既ニ成、太上皇  
帝之位引率凶徒、指籠帝上、移近衛殿、寶劔ハ山徒率官軍攻中堂  
金藏主日野殿討死、矢籠帝上、移近衛殿、寶劔ハ山徒率官軍攻中堂  
書銘捨之、即禁裏ハ名レテ被崇ト見エタリ、尊義東洞院一位  
王ハ即金藏主ナルコト、此ノ被崇ト見エタリ、尊義東洞院一位  
入道ハ有親トアリ、南方紀傳ニくみし傳しど、何さましき、空  
子右大辯相公ヲイ資親ハ、尊存紀せざるよ、を陳トヤキ也と

つひふらうくまのせぬ、山上より衆徒使節等各馳向あひど、  
 宮ヲイフ尊義王以下武ハうたせ或ハ自害せとどふしぎあり、  
 ちとあり、寶劔ハヤがく清水寺の傍に捨置しを、心月坊とい  
 ふ寺僧にひ取りて進たり、恩賞侍りまや、さて去廿三日、  
 神宮橋淨馬、陸厩を出て、敷まをり汗を流し、鞍を去く、おとあ  
 りて、又陸厩に帰入、後ふ由次第奏状、凶徒入の夜のも  
 也、神宮橋まをりのりどるいよくあふたふこそ侍也

東寺修行日記 嘉吉三年九月廿三日子刻大内焼亡、東西棟

門計殘、主聖様 皇○後花園天ハ近衛殿出御成、後日風聞ハ南方

高秀沙汰之ハ○高秀ハ尊義王ヲ御記ニ尊義王ヲ誤リテ高秀ト

ト為ス、大和紀伊ノ賊徒尊義王ヲ以テ事ヲ奉ゲタル故ニ、者聞御

子尊義王ヲ以テ大將号ニ擬シ、以テ事ヲ奉ゲタル故ニ、者聞御

記ニハ南方謀反ヲ大將号ニ擬シ、以テ事ヲ奉ゲタル故ニ、者聞御

奉公仁奉取出 東○三種神器悉以御成三種神器悉以御成三種神器

三條殿取出被申進上之神璽此時ヨリ 不見云々トアルヲ以テ是ナリト為ス

東寺長者補任 嘉吉三年九月廿三日子刻大内焼失云々三

百人計亂入付火之間、其後糺明之時五十三人之頸切之、殘者

共山中堂籠之間、山門又押寄、大將南方高秀也、○高秀ハ即尊

文ニイヘ頸取之 出テ實ハ父尊義王ノ頸ヲ取ルタルナリ

康富記 文安元年八月六日醫師宮内卿上座語云、南方宮方

於大和吉野奥被舉御旗之由 王○南方宮トハ尊義王ノ子尊秀

重圍ヲ脱ス、是ニ至テ復兵ヲ自熊野本宮令注進、檢校聖護院

舉ゲ吉野ノ奥ニ據ルヲイフ 自熊野本宮令注進、檢校聖護院

云云、件注進昨日參着聖護院云云、新宮那智注進到來不審也、

自吉野被觸、廻熊野三山之故、存知歟、又或説云吉野奥ト云共

非大和國是紀伊國內也、北山南山トテ兩所アリ、北山ニテ宮

方被舉御旗之由有其聞矣 於○尊秀王神璽ヲ奉戴シ北山ニ上

野宮御申類歟、○上野宮トハ後村上天皇ノ稱セシ北山ニ上

ナリ、此ノ王モ亦此ノ際大和河内和泉ノ間ニ於テ兵ヲ擧グ、故ニ此ノ語アリ

南方紀傳 文安元年秋八月南帝ノ太子二人御マス、一人ハ

吉野ノ奥ニテ神璽ヲ保チ蜂起シ玉ヲ尊秀王一人ハ和泉

河内大和ノ浪人ヲ從ヘ、八幡ニ籠ラセ玉ヲ僧圓悟

紀伊國色河文書 忠義押花 色川郷即先皇由緒之地也、其龍

孫○後龜山天皇ノ皇鳳輦已幸大河内之行宮也、早參錦幡下

可致軍功忠、然者可有恩賞者也、天氣之趣如此矣、乙亥八月六

日、色河郷惣中○忠義トアルハ即忠義王ニシテ、尊義王ノ子

帝ヲ稱セシコト以テ見ルベシ、乙亥ハ即康正元年ナリ

赤松記 其頃三條内大臣實量ト申テ上意北條中経少

所涉意ハ、彼少内石見方郎左衛門ト申人ヲ語以、三條教を

奉教上意を重テ調ヘ、少内法師丸○赤松政則を赤松の春智

子能石出、五歳ニ成ルルを取立けり云云 爰ハ南方ト申テ兩

宮○尊秀王及忠 隆盛ハ、是ハ左平次ノ比位弟ノ少門ノ少末

あり、何極天下を一度少内省有ク、少兄弟吉野ノ真北山ト申所

子一ノ宮ハ少内、二ノ宮ハ河野ト申所、少内ハ、相赤松衆

□□天下第一の忠愛ヲ頼リ、此家再興を致さんと云

テ、工吏して此者學教を討果シ、神璽を取返シ、存るべシ、然ら

バ次郎丸ハ少内安堵あるべきいと内ヲ以テ訴訟ヲ所シ、上

意の少内諺ホ叶ヒ、三條教を以禁中ヘ申上、相吉野殿○尊

及忠義王ヲイフを孫トヒヤさん謀シ、赤松衆人トモ弟の置所あく

堪忍もつごのぬるあれバ、吉野教を彰申由ト細ク吉野ヘ

系リ、何とぞ赤松衆人一味ヲテ、都を改修シ、一定ハ都ヘ少

供申さむと云々申入ルヘバ、少内心ノ義あり、相大勢ハ少内

心を以テ、夜討ヲ入ルべき人教を申シ、間島中村深正四方

四郎以下大和國宇智郡まで出勢シ、康正二年丙子十二月廿

日吉聖へまゐり隙をうけひける、終小次の年長祿元年丁  
 丑十二月二日の夜子刻、大雷ありて、所油断の時刻を伺ひ、西  
 宮へ二手子成、一交子及入、北山より一の宮ヲ尊秀王をバ、丹  
 生屋常刀左衛門同弟四郎左衛門兄弟子て討中、所頼をバ常  
 刀取中、彼内裏北所たあら、所頼を隠し、血をひき、吉野  
 十八郷の者起り、海より進ひ、血をひき、所頼を隠し、血をひき、  
 奇特あること、血涌上り、血をひき、所頼を隠し、血をひき、  
 伯母谷とや所を討死し、其時所頼をひき、所頼を隠し、血をひき、  
 又二の宮ヲ忠義王をも同ト討分ち、おそたし、所頼を隠し、血をひき、  
 所頼北所頼をひき、所頼を隠し、血をひき、所頼を隠し、血をひき、  
 大山ども隔て、道遠しとい人ども、赤松衆互に堅中合回し、時  
 節、お果し、中、志うせども、討手の兵も大形、道よりうとせ、  
 多あ、残る、雪よりうづをれ、所頼をひき、所頼を隠し、血をひき、

寺藤を捕入道○名ハ則識法名大和衆越智と申者、をたせ、

種との謀をぬら、郷民を去のし、とり○此ノ事ハ次の年  
 長祿二年八月晦日、所頼を内裏へ、備中○根元赤松再興記、天地  
アリト雖ヘドモ、大率コレニ同ジ、故ニ此ニ掲載セズ、應仁別  
記モ亦此ノ事ヲ記ス、而レドモ誤聞ニ出ル者多シ、採用スベ  
ズカラ

上月記 兩宮○尊秀王及忠義王ヲイフ御頭并神璽同時雖奉取、或被討

埋深雪、適殘者迷山野、是故急度不及、注進之處、小寺藤兵衛入

道大和越智申合、調有様之注進、小河中務少輔亦同之

一神璽出現之計略、小寺藤兵衛入道性説罷下和州、小河中務

少輔相共ニ廻種々調略、重而奉取返訖、終翌年長祿二年八月

晦日奉成神璽入浴畢、然條々忠節依無比類、如御約諾、加賀半

國并備前國新田莊、伊勢國高宮保等應御成敗云云○赤松氏  
吉野ノ奥北山ノ大河内ニ於テ尊秀王ヲ殺シ、河野谷ニ於テ  
忠義王ヲ殺シ、神璽ヲ奉戴シテ逃ル、吉野ノ殺シ、河野谷ニ於テ

レヲ殺シ、神璽ヲ奪取テ、尊秀王ノ叔父尊雅王ニ奉ル。尊雅王  
 コレヲ奉戴シテ、神璽ヲ稱ス。小寺ノ性説朝、小寺性  
 攻撃レテ、遂ニ神璽ヲ獲ル。之ヲ始テ、朝廷ニ獻ズ。小寺性  
 説、小河某共ニ謀テ、神璽ヲ獲ル。○尊雅王ハ次ニ辨ズ  
 南方紀傳 長祿二年六月南帝ヲ尊雅王十津川ヨリ吉野ニ  
 遷行リ。○尊雅王ハ神璽ヲ奉ジテ、十津川ヨリ吉野ニ  
 移居ス。ト為ス。尊雅王去歲已ニ北山ニ於テ卒ス。當時其ノ  
 事實詳ナラズ。故ニ尊雅王ヲ以テ、尊雅王ト為ス。誤レリ。而  
 ドモ、小寺性説、小河某ガ者アリ、故ニ此ニ引用ス。同月京勢  
 ノ事ニ至テハ、從フベキ者アリ、故ニ此ニ引用ス。同月京勢  
 ○兵ヲ氏フナリ、吉野ヲ攻ム。南軍防ギ戰フ。南帝十津川ニ遷  
 幸。同月廿七日、夜南帝御手ヲ負セ、玉ヒ、高福寺ニ遷。幸有テ終  
 ニ崩御アリ、則高福院ト號奉ル云々。○按ズルニ、尊雅王ハ創  
 二高野上ノ高福寺ニ於テ卒ス。而シテ、神璽所在分明ナラズ。  
 小寺性説、村氏ヲ誘シ、遂ニ神璽ヲ獲ル。タルナリ。赤松記ニ、小  
 寺後トテ、入道云々。卒セシメ、六月廿七日、神璽ノ入洛  
 云々。ハト晦日ナリ。尊雅王ノ間、三十餘日ヲ經クル。尊雅  
 王卒シテ、後、搜索シテ、獲タルコトヲ以テ、知ルベシ。雅  
 天地根元登代圖 長祿二年八月世日、神璽入洛、奉入三寶院

天神堂

季瓊日録 長祿二年九月二日、神璽前月晦日入洛、今晨為御  
 禮諸老被參也

梅花無盡藏 中原一寶 赤松之徒入吉野、奪神璽、獻朝、忽運子

房帷幄、籌官軍、奪璽叫千秋、今朝再入吾王手、風不鳴、條四百州

續神皇正統記 第百四代後花園院、璋ハ彦仁云々、康正二年

一條東洞院、所より新造内裏土御門殿、小遷幸、卒後神璽ハ

赤松以下、の紫が壽菜もて、右聖の勇より、長祿二年内裏、小渡

所、去のたびも明德の別を、与らむとあり、三種の御事ハ

以、亦ところく、よくそとく、見え侍る、但寶剣ハ海底、小威を、

く、神鏡ハ火中、小形をおとせ、玉璽のみぞ、神代より、とべ

て、さつりも、あく、儀、終と侍り侍る、今もあきくハ三種、兼備

て、多代の所も、とりも、かひある、く、ちと侍る、一人、夢あきハ



兆民頼之といへり、諸國も穩まると天下を治給ふらと世傳  
年、文武天皇以後ハたぐひなき寶祚の延長もてたまはり  
○長祿二年八月晦日神皇大内ニ歸坐シ、三種神器乃備ハル  
而シテ後天皇歷世相傳ヘテ今日ニ至ル其ノ間事アルコト  
略ニ從フ

寶鏡災

天德四年ノ災ノ事

日本紀略 天德四年九月廿三日庚申、今夜亥三刻内裏焼亡、  
火出自宣陽門内方北掖陣不出中隔外、天皇先御中院次御朝  
所、頃之御職曹司定行之、寮警固使□□□□□□累代珍寶  
多以焼失、參議重信朝臣仰焰之間一豎光其躰如龍爛々、丑刻  
火止、廿四日辛酉寮務三箇日、又昨夜鏡三和名加之古止古呂并太刀契  
不能取出、今日依勅令搜索餘燼之上已得其實、但調度焼損其  
真猶存、形質不變甚為神異、即大藏省韓櫃令奉納之云十一

月三日己巳縫殿大允藤文紀參申云、依宣旨御坐内裏賢所三  
所奉遷、縫殿寮之間内記奉納威所三所、一所鏡件鏡雖在猛火  
上而不涌損、即云伊勢御神云云、一所真形無破損長六寸許、一  
所鏡已涌亂破損、紀伊國御神云云、一所賢所寶鏡三面、中ニ  
ニ據テ見 太刀卅八柄之中、四柄自清凉殿求出之、卅四柄自温  
明殿求出之、其中有節刀契七十四枚、皆魚形也、魚符ナリ自背  
中別、兩各有銘、併全不損、長各二寸餘許、八枚金、十四枚銀、五十  
枚銀塗物、又有金銀涌亂一斗餘計也、左近少將源伊陟將監藤  
原佐理云云、女官等同以祇候云云  
釋日本紀卷七 天德四年九月御記曰、天德四年九月二十四  
日、鑿求温明殿所納之神靈鏡并太刀契等、申時重光朝臣來申  
云、瓦上有鏡一面、其鏡徑八寸許、頭雖有小瑕、專無損、圓規并蒂  
等甚分明、見之者無不驚感、廿五日又求得焼損鏡一面、外記記

曰威所三所、一所齋鏡件御鏡、雖在猛火上、而一所魚形、長六寸、許一所鏡、疑已涌訖、破損、紀伊御神云々、伊勢御神云々、一所、此ハ魚形トアルハ、鏡ナリ、魚形ハ魚符ノコトニテ別ナリ

寬弘二年ノ災ノ事

日本紀略 寬弘二年十一月十五日己未、欲行甲斐國真衣野駒引之間、月蝕、仍上卿退出、子時宮中火殿上皆燒亡、天皇先御中院次駕腰輿、御職曹司破壞殊甚、仍御朝所神鏡同燒損、十六日庚申、依內裏燒亡、諸司廢務、左近少將重尹奉宣旨、奉求賢所之間、灰中神鏡二面、奉求出之○神鏡三面ノ中、一面ハ既ニ天又燒亡穢中神事各可停止之、十八日壬戌、左大臣長ヲイフ仰外記云、神鏡燒損可被鑄改歟、將下燒可奉安置歟、仰諸道可令勘申者云々

三年六月十三日癸未云々又仰諸道令勘神鏡燒損可改鑄否

事云々七月三日癸卯召御公卿於御前、令定申諸道勘申神鏡事、不可改鑄之由、群議了

小右記 寬弘二年十一月十五日子刻許云云、內裏燒亡者云

云、火起、自温明殿神鏡所謂太刀并契等不能取出云云云

七日云云、定申神鏡燒損事、其定趣者可被鑄歟、將如何者、諸卿

定申旨一同也、神鏡趣并相違事等、先令勘諸道、可被定歟、若可

改鑄歟者、以俗銅不可混神物、以所燒遺神物等可安置歟、猶可

安置鏡體、新以銅奉鑄相副奉安置如何、抑先令進道々勘文後

又令祈申伊勢宮兼依御占可被鑄造歟、昨有識者卿相等於左

府○道長宿廬有可加鑄之議、余不甘心、今日未有事定之前於

殿上談後、是今及定時變、昨議隨愚按如何、定申詞左大辨書之

左府令奏聞、被仰可令諸道勘申之由云々神鏡太刀并契書燒

亡、鏡僅有蒂、自餘燒損無圓規失鏡形云云○無圓規失鏡形ト

ニ雁テ神鏡形ヲ失村上御記云天德四年九月御記ハ上ニ引ク所ノ  
 ヒシヲ見ルベシヲ失村上御記云天德四年九月御記ハ上ニ引ク所ノ  
 即是ナリ云云廿五日清遠伊陟等合申又求得燒鏡一面云云  
 故殿御日記云四年九月ノ日燒トハ藤原實賴ノ日記ニテ天德  
 恐所雖在火灰燼之中曾不燒損云云鏡三面中伊勢大神紀如  
 件說似三面云云○是迄ハ實賴ノ日記十二月九日左頭中将  
 來乍立云今日西列神鏡自太政官奉移東三條院可供奉其事  
 者云云十日頭中将示送云神鏡昨奉移但開舊御韓櫃持奉納  
 新辛櫃之間忽然有下如日光照耀內侍女官等同見神驗猶新最  
 是足恐驚者

權記 寬弘二年十二月九日云々內侍所神鏡日者御官左大

辨曹司今日奉移東對左頭中将供奉以新辛櫃欲移入之間有

照耀云云○神鏡ノ異靈アリシ故ニ人或ハ以テ燒損セスト

關ト見工建替御記ニ云ク寬弘燒亡始雖燒無損有諸道勘

文公卿勅使始有宸筆宣命于時殿中光耀知御躰不變ト見工勘

タリ是等ノ說皆靈驗ノ奇特ナルニ出ヅ而レドモ日本紀略  
 及小右記ニ神鏡燒損トアルヲ以テ實說ト為スミシ百練鈔  
 損ト為ス

長久元年ノ災ノ事

百練鈔卷四 長久元年九月九日皇居上東門院燒亡主上後

朱雀天皇先御法成寺東金堂廊內侍所神鏡在灰燼中燒損神

鏡在灰燼中遺藏人頭左中将資房左少將經季等令求之僅唯

奉得御躰六寸許即奉裹入折櫃又得一切寸許其躰燒損不分

明云云次々得二三寸許各々段々也又如金玉之物數粒得之

隨又奉加入彼櫃也十日內侍所官二人夢想云一人夢云彼本

所有小蛇頗有惱氣又一人夢云彼本所有人云吾相離獨身在

此所云云仍女官等向彼所奉鑿求之處如王金之物求得二粒

即奉入畢有靈驗可感歎云云已上見資房卿記九月十二日諸

卿於御前定申火事以後雜事又定申神鏡燒損事任寬弘二年

例可被行之由定了

中右記 寬治八年十月廿 長曆四年九月〇〇 子刻京極殿燒

亡年也 元内侍所靈鏡為灰燼 太刀契許取出云云 〇神鏡長久

日ノ災ニ罹リ復焼損セシコト 百練鈔及中右記裏書ニ詳

ナリ而ルヲ建替御記ニ長ク燒トナルハ 順徳天皇ノ御所ノ御辛

合期而有光入唐櫃更不燒云々 者ナラハ因云内侍所ノ御辛

慮アリテ記セテマヒルニ所ノ者ナラハ因云内侍所ノ御辛

攝ハ二合ナリ謹テ按ズルニ懸ノ大合ハ伊勢ノ建替御記ニ

賢ク云一合ハ二合又五合太刀契鈴印等トトアリ建替御記ニ

鏡ノ所云櫃五合ハ太刀契鈴印等トトアリ建替御記ニ

雀ノ皇ヨリ以今上ニ契鈴印等トトアリ建替御記ニ

凡テ神鏡皆災ヲ免ルニ止リ傳テ皇宮ニ間及ハザル者アリ

神宮御正體御動座ノ事

神宮御正躰トハ天照太御神ノ皇孫瓊々杵尊ニ

授與セシ所ノ寶鏡ニテ即天照大御神ノ御魂代

ナリ瓊々杵尊ヨリ以來崇神天皇ニ至リ之ヲ大

殿ノ内ニ齋祀ス天皇深ク其ノ神威ヲ畏レ共住

スルニ安カラズ遂ニ新ニ齋宮ヲ造營レテ以テ

之ヲ奉安ス

崇神天皇紀 六年百姓流離或有背叛其勢難以德治之是以

晨興夕惕請罪神祇先是天照大神倭大國魂二神並祭於天皇

大殿之内然畏其神勢共住不安故以天照大神託豐鍬入姫命

○豐鍬入姫命ナリ崇神於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬此云

神天皇ノ皇女ナリ崇神於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬此云

亦以日本大國魂神託淳名城入姫命崇神天皇ノ皇女ナリ崇

云々崇神天皇六年天照大御神ノ御魂代ヲ皇女豊鍬

數御動座アリ初ト為ス是ヨリ後

垂仁天皇紀 二十五年春二月丁巳朔甲子詔阿倍臣遠祖武

淳川別和珥臣遠祖彦國葺中臣連遠祖大鹿島物部連遠祖十

千根大伴連遠祖武日五大夫曰我先皇御間城入彦五十瓊殖

天皇○崇神天ヲイフ惟レ獻レ作レ聖欽明聰達深執謙損志懷冲退綢繆機  
 衡禮祭神祇刻已勤躬日慎一日是以人民富足天下太平也今  
 當朕世祭祀神祇豈得有怠乎三月丁亥朔丙申離天照大神於  
 豐鍬入姬命託于倭姬命○倭皇命女ハ無仁爰倭姬命求鎮坐大  
 神之處而詣菟田篠幡佐此云更還之入近江國東廻美濃到伊  
 勢國時天照大神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪  
 歸國也傍國可怜國也欲居是國故隨大神教其祠立於伊勢國  
 同書一云天皇以倭姬命為御杖貢奉於天照大神是以倭姬  
 命以天照大神鎮坐於磯城嚴檀之木而祠之然後隨神誨以丁  
 巳年○無仁天皇世冬十月甲子遷于伊勢國渡遇宮○前說ト  
 月ト為倭姬命世記モ亦廿六年十  
 皇太神宮儀式帳天照坐皇太神乃伊勢國度會郡宇治里佐  
 古久志留伊須々乃川上爾御幸坐時儀式磯城嶋瑞籬宮御宇

御間城天皇○崇神天御世以往天皇同殿御坐而同天皇御世  
 爾以豐稻入姬命為御杖代出奉支豐稻入姬命御形長成支以  
 次纏向珠城宮活目天皇○垂仁天御世爾倭姬內親王遠為御  
 杖代齋奉支美和乃御諸原爾造齋宮出奉天齋始奉支爾時倭  
 姬內親王太神乎頂奉且願給國求奉時爾從美和乃御諸宮發  
 且令出坐支爾時御送驛使阿倍武淳川別命和珥彦國葺命中  
 臣大鹿嶋命物部十根命大伴武日命合五柱命等為使且令  
 入坐支彼時宇太乃阿貴宮坐只次佐々波多宮坐只其爾即大  
 倭國造等神御田并神戶進只次伊賀穴穗宮坐只次阿閑柘植  
 宮坐只其爾即伊賀國造等神御田并神戶進支次淡海坂田宮  
 坐只次美濃伊久良賀宮坐只次伊勢桑名野代宮坐只其宮坐  
 時爾伊勢國造遠祖建夷方乎汝國名何問賜曰久神風伊勢國  
 止白支即神御田并神戶進支次河曲次鈴鹿小山宮坐支彼時

川俣縣造等遠祖大比古乎汝國名何問賜只白久味酒鈴鹿國  
 止白支其即神御田并神戶進支次安濃縣造真系枝乎汝國名  
 何問賜支白久草蔭安濃國止白支即神御田并神戶進支次壹  
 志藤方片樋宮坐只其在阿佐鹿惡神平驛使阿倍大稻彥命即  
 御共仕奉支彼時壹志縣造等遠祖建咎子乎汝國名何問賜支  
 白久実佳咎鹿國止白支即神御田并神戶進支次飯高縣造乙  
 加豆知乎汝國名何問賜只白久忍飯高國止白支即神御田并  
 神戶進支而飯野高宮坐支彼時佐奈乃縣造御代宿禰乎汝國  
 名何問賜支白久許母理國志多備乃國真久佐牟氣草向國止  
 白支即神御田并神戶進支而多氣佐佐牟延宮坐支彼時竹首  
 吉比古乎汝國名何問賜只白久百張蘓我乃國五百枝刺竹田  
 乃國止白支即櫛田根椋神御田進支次玉岐波流磯宮坐只次  
 百船乎度會國佐古久志呂宇治家田田上宮坐支爾時宇治大

内人仕奉宇治土公等遠祖大田命乎汝國名何問賜支是川名  
 佐古久志留伊須々乃川止申是川上好大宮地在申即所見好  
 大宮地定賜比支朝日來向國夕日來向國浪音不聞國風音不  
 聞國止弓矢鞠音不聞國止大御意鎮坐國止悦給互大宮定奉  
 支云鎮○天照大御神ノ御魂代大内ヲ出タマヒテヨリ假ニ  
 鈴宮ニ鎮坐シタマフコト有テ伊勢國度會郡五十  
 來御動坐アルコト無シ  
 熱田神社御正體御動座ノ事  
 熱田神社御正躰トハ天照大御神ノ皇孫瓊々杵  
 尊ニ授與セシ所ノ寶劍ナリ瓊々杵尊ヨリ以來  
 崇神天皇ニ至リ之ヲ大殿ノ内ニ齋祀ス天皇深  
 ク其ノ神威ヲ畏レ共住スルニ安カラズ遂ニ新  
 ニ齋宮ヲ造營シテ寶鏡ト共ニ之ヲ奉安ス

古語拾遺

至于磯城瑞垣朝

○崇神天皇漸畏神威同殿不安

故更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏更鑄鏡造劍  
 以為護身御璽是今踐祚之日所獻神璽之鏡劍也仍就於倭笠  
 縫邑殊立磯城神籬奉遷天照大神及草薙劍令皇女豐鍬入姬  
 命奉齋焉云々熱田ノ御正躰ハ神官ノ御正躰ト共ニ大内  
 處ナリ而シテ後伊勢國度會郡五十鈴宮ニ鎮坐  
 景行天皇紀 四十年夏六月東夷多叛邊境騷動秋七月癸未  
 朔戊戌天皇詔群臣曰今東國不安暴神多起亦蝦夷悉叛屢略  
 人民遣誰人以平其亂群臣皆不知誰遣也日本武尊奏言臣則  
 先勞西征是役必大碓皇子武尊ノ兄ナリ之事矣時大碓皇子  
 愕然之逃隱艸中云々於是日本武尊雄詰之曰熊襲既平未經  
 幾年今更東夷叛之何日逮于太平矣臣雖勞之頓平其亂則天  
 皇持斧鉞以授日本武尊曰云々於是日本武尊乃受斧鉞以再  
 拜奏之曰嘗西征之年賴皇靈之威提三尺劍擊熊襲國未經浹

辰賊首伏罪今亦賴神祇之靈借天皇之威往臨其境示以德教  
 猶有不服即舉兵擊仍重再拜之天皇則命吉備武彥與大伴武  
 日連令從日本武尊亦以七掬脛為膳夫冬十月壬子朔癸丑日  
 本武尊發路之戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姬命曰今被天  
 皇之命而東征將誅諸叛者故辭之於是倭姬命取艸薙劍授日  
 本武尊曰慎之莫怠也是歲日本武尊初至駿河其處賊陽從之  
 欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊  
 信其言入野中而覓獸賊有殺王之情王謂日本放火燒其野王  
 知被欺則以燧出火之向燒而得免一云王所佩蓑雲自抽之薙  
 劍曰艸薙也蓑雲王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之云々  
 此云茂羅玖毛爾天皇〇景行天亦頗詔倭建命言向和平東方  
 古事記中卷 十二道之荒夫琉神及摩都樓波奴人等而副吉備臣等之祖名  
 御鉏友耳建日子而遣之時給比々羅木之八尋矛故受命罷行

之時參入伊勢大御神宮拜神朝廷即白其姨倭比賣命者天皇  
 既所以思吾死乎何擊遣西方之惡人等而返參上來之間未經  
 幾時不賜軍衆今更平遣東方十二道之惡人等因此思惟猶所  
 思者吾既死焉患泣罷時倭比賣命賜草那藝劍亦賜御囊而詔  
 若有急事解茲囊口云々故爾到相武國之時其國造詐白於此  
 野中有大沼住是沼中之神甚道速振神也於是看行其神入坐  
 其野爾其國造火著其野故知見欺而解開其姨倭比賣命之所  
 給囊口而見者火打有其裏於是先以其御刀斫撥草以其火打  
 而打出火著向火而燒退還出皆切滅其國造等即著火燒  
 熟田緣起 冬十月○景行天皇ノ四壬子朔癸丑倭武尊發路  
 戊午奉拜伊勢大神宮啓齋王倭姬命曰齋王者倭武今奉皇命  
 東征逆賊頻慕恩顏枉道拜辭倭姬命感其心授一神劍曰努力  
 努力莫離於身又賜一囊曰若有急事解斯囊口倭武尊拜領劍

囊行首路到尾張國愛智郡時稻種公啓曰當郡火上邑有桑梓  
 之地伏請大王稅駕息之倭武尊感其懇誠踟躕之間側見一佳  
 麗之孃問其姓字知稻種公之妹名宮酢姬即命稻種公聘納佳  
 孃○是熱田ノ御正躰由ナリ合昏之後寵幸周厚數日淹留  
 不忍分手既而與稻種公議定行路之事曰我就海道公向山道  
 當會彼坂東之國言辭約束各向前程倭武尊到駿河之時賊師  
 陽從之欺曰云々倭武尊忽被誑誤計略難施其所帶神劍自然  
 抽出薙四面之草云々悉焚滅其賊黨曾無噍類故名其處曰燒  
 津劍薙草薙○是ヨリ先藁雲劍ト稱セシテ至テ草  
 征ノ功畢テ後尾張國ニ鎮坐ス事ハ次下ニ辨ス  
 景行天皇紀 四十三年云々日本武尊更還於尾張即娶尾張  
 氏之女宮篁媛而淹留踰月於是聞近江膽吹山有荒神即解劍  
 正躰○熱田ノ御置於宮篁媛家而徒行之至膽吹山云々○古事記

三上卷又上 付 衆



所日本紀二同故  
此二揭載セズ

熱田緣起 促駕還著宮酢姬宅于時獻大饌宮酢姬手捧玉盞  
 以獻云々倭武尊淹留之間夜中入廁廁邊有一桑樹解所帶劍  
 掛於桑枝出廁忘劍還入寢殿到曉驚寤欲取掛桑之劍滿樹照  
 耀光彩射入然不憚神光取劍持歸告姬以桑樹放光之狀答曰  
 此樹舊無恠異自知劍光默然寢息其後語宮酢姬曰我歸京華  
 必迎汝身即解劍授曰寶持此劍為我床守時近習之人大伴建  
 日臣諫曰此不可留何者承聞前程氣吹山有暴惡神若非劍氣  
 何除毒害倭武尊高言曰縱有彼暴神舉足蹴殺遂留劍上道到  
 氣吹山山神化大蛇當道倭武尊不知主神化蛇謂是大蛇必暴  
 神之使也若殺主神其使豈足愁乎因超蛇行數里暴風零雨山  
 谷杳冥乃棲遑不知所為跋涉冒雨強行僅得出山脚失意如醉  
 云々自後倭武尊體中不豫欲歸尾張便移伊勢云云遣吉備武

彦奏於天皇曰臣受命天朝遠征東夷則被神恩賴皇威而叛者  
 伏罪荒神自調卷單戢戈凱歌而歸而天命忽至隙駒難停豈惜  
 此身之亡悔不面拜復命既而過鈴鹿山病痛危迫故歌曰遠登  
 賣能〇宮篁媛登許能辨爾和賀於岐斯都留岐能多知曾能多  
 知波夜渡鈴鹿河中瀨忽隨逝水時年三十云々倭武尊奄忽遷  
 化之後宮酢姬不違平日之約獨守御床安置神劍光彩亞日靈  
 驗著聞若有禱請之人則應感同於影響於是宮篁姬會集新舊  
 相議曰我身衰老昏曉難期事須未暝之前占社奉遷神劍衆議  
 感之定其社之地〇熱田神社始テ御正神社之地始テ御正神社之地  
間御正社此於文據天見ルベシ是ヨリ後天皇廿五代其ノ  
レ盗ル其ノ變アリ次下ニ揭載  
 天智天皇紀 七年云々是歲沙門道行盜草薙劍逃向新羅而  
 中路風雨芒迷而歸〇釋日本紀ニ從テ迷フ

熱田縁起 天命開別天皇○天智天七年戊辰新羅沙門道行  
 盜此神劍將移本國竊祈入于神祠取劍裹袈裟逃去伊勢國一  
 宿之間神劍自脫袈裟還著本社道行更還到練禪禱請又裹袈  
 裟逃到攝津國自難波津解纜歸國海中失度更亦漂著難波津  
 云々于時吏民驚恠東西認求道行中心作念若棄去此劍則將  
 免捉搦之責乃拋棄神劍劍不離身道行術盡力窮拜手自首遂  
 當斬刑○是ヨリ後熱田ノ御正躰大内ニ鎮座ス蓋シ賊アリ  
 田ノ御正躰大内ニ鎮座スルコトヲ懼レテナラシム而シテ後熱  
 元年ニ至テ再々ビ熱田ニ鎮座ス事ハ次下ニ辨ス  
 天武天皇紀 朱鳥元年六月己巳朔戊寅ト天皇病崇草薙劍  
 即日送置于尾張國熱田社  
 扶桑略記卷五 朱鳥元年八月云々以草薙劍送尾張國熱田  
 神社○八月ヲ以テ是ト為スナリ  
 熱田縁起 天淳中原瀧真人天皇○天武天朱鳥元年丙戌夏

六月己巳朔戊寅ト天皇御病崇草薙劍即勅有司遷置于尾張  
 國熱田社自爾以來始置社守七負一人為長一人為列並免徭役○朱鳥  
 月御正躰再々ビ熱田ニ鎮座シテ  
 ヲリ以來御動座アルコト無シテ

神器篇 終



書舊典類纂皇位繼承篇後  
昔司馬光作通鑑。朱熹作綱目。杜佑作通典。馬  
端臨作文獻通考。其功於學者大矣。然而其書  
非古雅作者。歷代皆有史。皆有志。故此諸書。  
貫穿歷代之史而作之。其詳於治亂興廢者。為  
通鑑。為綱目。其詳於典章經制者。為通典。為通  
考而已。夫作史者。才學識胸一不可。而史之所  
最難在志。固非徒於典章不可作。江海曰。  
修史之難。莫出於志。信矣。而我邦之史。必彼又

為更難作何則。我開國以來。一千年間。記述寥寥。至伯府用封建之政。財重。在武力。不復用心於圖書。是以文獻不足。徵加之萬。立一系。上下二千五百三十八年。之典故。非以一代典故。之學。作一代之志。之也。志既難作。而不作。書之詳於典章經制。如文杜馬二氏者。亦無多焉。實為學者通惠。此所以本院有舊典類纂之舉也。書記官橫山由清。書記生黑川真賴。共以老於典故。任其編纂。一役。而福利。議官檢閱之。其為

書事。以類聚。力廣搜博。採不肯希臆說。又不肯遽決取捨。庶幾。予我祖宗典章經制。可得而考。而他日。有作志。作典章經制之書者。可據以為參考。如其體裁。稍近。禱糶。固出於不得已也。自如。起稿。既歷。數年。全部之成。未可豫期。而如。皇位繼承。誠為國家大事。因制於法。而經國者。所宜先。故先。諸篇告成。乃謀。付之梓。如以。省傳寫之。勞。以。不。嘗。贊。成。此。舉。也。附。新。語。於。卷。尾。以。記。其。始。云。

明治十一年七月

議官後四位細川潤次郎



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '議官' and '細川']*

